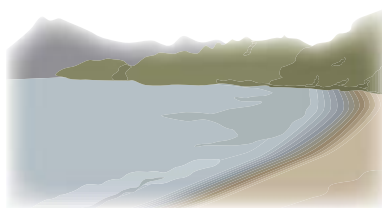


# 遠 州 灘



清  
松  
吾  
郎

## 目次

第一章	門出	四
第二章	浜松基地	一〇
第三章	嗚呼 三田一佐	一七
第四章	抗争のはしり	二三
第五章	縁は夢か	二九
第六章	決闘	三五
第七章	美保湾の悲劇	三九
第八章	再生	四六

# 遠 州 灘

寒空の下で、行き交う人々が、肩をすりあわせるような路地だった。得体の知らない飲食物の匂いが辺りに充満していて、空きっ腹を抱え、痩せ細った人たちが、あてどもなく足を運んでいる。

路地の両側に小さな立ち飲み屋が軒を連ね、バクダン焼酎に群がる人たちの中には、酔って眠りこんだまま、再び目覚めない者もいる。少くとも朝目覚めたとき、大量の目ヤニが目を塞いでいるのに仰天する。メチル分の多いアルコールを口にしたためである。

太平洋戦争が終わったあとで、空腹を満たすにも、東の間の悦楽を手に入れるにしても、殺伐として命懸けな時代だった。

杉浦研一は中学の三年生だが、今日は土曜日なので授業は午前中に終わり、日頃母親に絶対に近づくなと言われていた、池袋の西口にある闇マーケットに入りこんだ。

あちこちに、サッカリンやズルチンで甘味をつけた、今川焼きを売る店があり、研一はそれが目当てだった。彼が近づいた店の前で、薄汚れた軍服を着た中年男が、一つだけ買い求めた今川焼きを掌に乗せて、口に入れる前の感触を楽しんでいた。

そのとき、目だつて派手なスーツ姿の若い男が、研一を押し退けるように、急ぎ足で追い越したが、突っ立っていた男にぶつかり、男の手にしていた今川焼きが転げ落ちた。

「何をするんだ馬鹿野郎！」

ぶつけられた男が、顔色を変えて怒鳴った。

「なんだとこの野郎！ ぼやつと突っ立ってるてめえが悪いんだろうが」

若い男が、路上にある今川焼きを足で踏みにじった。

「貴様っ！……」

頭に血が昇つたよれよれの中年が、若い男に掴みかかった。男が怒声をあげて殴りつけると、中年がいきなり背負い投げを打った。投げられた男は背中を強打したらしく、呻き声をあげてのたうち回った。

そのうちに誰かが通報したのか、若い男の仲間が四人駆けつけ、中年男を取り囲

んで、店の裏側にある空き地に連れ込んだ。

四人連れは寄つてたかつて一人の男を殴り、倒れたのをかわるがわる蹴飛ばし続けた。男は顔中血に塗れ、凄惨な姿になって叫んだ。「殺されるーっ、助けてくれーっ！……」

遠巻きにして怖々と見守る人の間から、研一も恐る恐る首を出して見ていた。

「おい、あのままじゃ殺されるぞ、交番に報らせろ」

誰かが小声で言った。

「馬鹿言え、あいつらは天竜会だぞ。関わりあいほご免だぜ」

誰かが応じた。蹴られている男は声も出なくなっている。そのとき、カーキ色の作業服を着た男が空き地に入ってきた。

「おい、もうそのくらいでやめんか、人を殺せばお前たちもブタ箱ゆきだぞ」

大きな声で叫んだ。四人はギョツとした様子で振り向いたが、相手が警官でもなく、風采のあがらない中年男とわかると、

「なんだてめえは、同じ目にあいてえのか？」

一人が駆け寄り、殴りつけようとした。声をかけた男は平然とした様子で、その手をふりはらった。

「この野郎！……、たたつ殺すぞ！」

叫び声をあげた男が、再び殴りつけようとしたとき、男の手刀がピシッと音を立てて、相手の腕を破った。——ウワッ！ 男が腕を抱えてうずくまった。

見ていた三人が一斉に駆け寄った。そのうちの二人は近くに積んである古材の中から、手頃な棒を取り出して迫った。一人が男めがけて棒を振りおろしたが、したたかに地面を打ち、手が痺れ棒を放り出した。

残りの二人が襲いかかろうとしたとき、棒を拾いあげた男が、目にも止まらぬ早業で二人の横腹を打った。——グエーッ、喚き声をあげた二人が地面に転がり、七転八倒した。手が痺れていた男が、茫然として立ち尽くし、降参というように両手をあげた。

「どれも軽く叩いたので、間もなく治まる。治まるまで傍についていてやれ」

言われて両手をあげた男が、顎をがくがくさせ領いた。

四人に殴られて血だらけになった男は、地面に坐りこんで、腰に下げていた手拭いで顔を拭いていた。幸い怪我は大したことがないらしい。

「あんた、歩けるか？ 歩けるなら早く立ち去った方がいいぞ、こんな場所にいるとろくなことにならない……」

血を拭った男は立ち上がり、意外にしっかりと足取りで、男に何度も頭を下げながら立ち去った。

研一はそこまで見届けていたが、傍の人が、——こんな所において、とぼつちり食ったら大変だ……、と言うのを聞き、恐ろしくなつて駆け足で家に急いだ。家に戻つてからも叱られると考え、マーケットの出来事は母親に話さなかつた。でも世の中には凄い人もいるものだ。自分もあんな強い人間になりたいと密かに考えていた。

研一たちが住む家は、立教大学の裏手にある戦前からの木造住宅だが、その界限だけが奇跡的に空襲を免れた。大分ガタが来てはいるものの、父親が遺してくれた安住の場所である。海軍将校だった父親は戦死し、残された家族は僅かばかりの遺族恩給に頼つて細々と暮らしていた。

夕方六時頃に、家族四人がサツマ芋の代用食で、佻しい食卓を囲んでいるとき、玄関で案内を乞う男の声が出た。

研一が立ち上がつて玄関を開けると、師走の夜がすっかり降りていて、近くの街灯の薄明りに、先程闇マーケットの空き地で、四人のヤクザ者を叩き伏せた男が立っていた。驚いて声も出ない研一に、「こちらは、杉浦さんのお宅ですね、お母さんの京子さんはおいでですか？」

研一の顔をじつと見つめながら訊ねた。

「は、はい、母はおりますが、何か？」

研一がおどおどしながら応対しているところへ、母親が顔を出し、「私が京子ですが、どちら様でしょうか？」

見かけない顔なので、不審そうに訊いた。

「突然お伺いして済みません。実は私フィリップピンで、杉浦少佐の部下だった山岡と申しますが、生前のお申しつけで、ご様子を伺いに参りました」

昼過ぎに池袋に着いたのだが、あちこち尋ね歩いているうちに、今の時間になつたと言つた。

話を聞いた母親は、山岡を仏間に招き入れた。父親の位牌に暫くの間手を合わせていた山岡が、四人を前にして、杉浦少佐の生前の姿や最後の模様を話して聞かせた。

杉浦少佐は、敗戦が見えてきた特攻作戦の中で、優秀な若者たちをこれからの祖国再建のために、出来る限り生き残らせようと、出撃延期工作等あらゆる手段を尽くしていたが、ある日の空襲で、機銃掃射を受け戦死したと説明し、自分が生きて

帰れたのは杉浦少佐のお陰ですと、涙ながらに語つた。

杉浦少佐は、顔を合わせるたびに家族の写真を見せ、幼い息子たちの将来を思い描いては、楽しそうにしていたそうだ。山岡は研一たちにそのときの嬉しそうな顔が、今でも目に浮かぶと言つた。

戦争が終わつた今頃になつての報告で、申しわけないと謝つたが、山岡は終戦後も現地に抑留されていて、ようやく、最近内地に戻つてきたそうである。

三日後、再び彼が訪れて来て、オート三輪に積んできた白米一俵と、野菜を沢山運びこんだ。研一たちは歓声をあげて喜んだが、母親は涙を流して山岡に感謝していた。

杉浦少佐は、海軍少尉に任官した頃の頃、同僚に誘われて東京に道場のあつた、『神道夢想流杖術』の修行をはじめ、この古武道が性にあつたのか、生涯を通じて研鑽を積んでいたらしい。

たまたま同門の後輩であつた山岡と、フィリップピンの航空基地で一緒になり、手を携えて修行に励んでいたのだが、杉浦少佐の杖術は、達人の域にまで到達していたと言つた。

山岡は帰りがけに、研一をじつと見つめ、

「研一君、なにかあつたら、いつでも八王子に相談にいらつしやい」父親のように暖かみのある、まなざしで言つた。

研一はその後、文京区にある都立高校に進学したが、自分の将来が不安でたまらなくなり、ある日山岡のところ相談にゆこうと考えた。

教えられてあつた八王子の住所を探しあてると、広大な畑の中に、小さな剣道の道場があり、看板には『竹刀しんたいおよび杖術競技』と書かれてあつた。

この当時はGHQの通達により、剣道をはじめ各種武道の教育は禁止されていて、関係者はやむを得ず『競技』という看板で、伝統の灯を絶やさぬように頑張つていた。

山岡はその道場主で、農業の傍ら近隣の青少年に、剣道と杖術を指導しているとのことだつた。

研一は杖術の虜になつた。『神道夢想流杖術』は慶長の頃、夢想権之助によつて創始されたものである。この杖術は現代までも続いており、東京、福岡を中心にその技法と思想が脈々として息づいている。

『刀槍は、人を傷つけ殺すゆえ望に足らず、杖は人を殺さず傷つけず、しかも己の

身を全うすることができる。それゆえに武の大本である』という主旨が伝書にされ  
てあり、旧海軍では、この杖術を修行する人間がかなりいた。

研一は杖術の修行に熱中し、時間さえあれば八王子に通い、それ以外にも教えら  
れた『形』の独り修行に励み、山岡から伝え聞いた父親の境地に、少しでも近づき  
たいと頑張った。

その頃、兄を戦争で失った母親の京子は、両親までもが相次いで病死したため、  
品川にあった実家の遺産を相続することになり、思いがけず生活が安定するよう  
なっていた。

そのお陰で研一は、R大学に進学することが出来、大学で『古武道研究会』を同  
好会として設立した。この頃縁があつて触れた『正木流拳法』の修行をはじめ、や  
がては本部道場でも一目おかれる存在になっていた。

学生課でも、次第にこの同好会を認知するようになり、部員も増えて新しい伝統  
が生まれた。入学以来、古武道の研鑽で明け暮れていた研一は、卒業を控えたある  
日、防衛庁が航空自衛隊の操縦幹部候補生を募集しているのを知り、早速応募した  
ところ、合格して入隊することになった。

## 二

現在では自衛隊と呼ばれる、戦後日本の新しい軍隊、警察予備隊は一九五〇年六  
月二十五日、朝鮮半島に発した戦火を直接の引き金として生まれた。

敗戦よりいまだ六年、焼け跡とヤミ市、経済活動、国民生活、どちらも混沌と困  
窮の淵をさまよっている時代であった。

その後、一九五四年四月一日の通常国会で当時の首相吉田茂が、施政方針演説で、  
自衛隊への改編方針を明らかにした。政府は、防衛庁設置法と自衛隊の『防衛二法  
案』を国会に上提し、保守三党の支持により、この年の六月二日までに衆参両院本  
会議で可決成立させた。これで新たに航空自衛隊が発足し、初代航空幕僚長には、  
文官出身の上村健太郎が就任した。

一九五七年、防衛大学の第一期生が卒業した。一九五三年の四月一日に保安大  
学校として開校したが、その後の改編で防衛大学校となり、晴れて一期生を送り  
出したものだった。

航空自衛隊のパイロットになるコースは三通りある、一つは高校を卒業の資格で  
航空学生になる道、あとは防衛大学校を出て航空課程に進む方法と、一般大学を卒

業して幹部候補生になるコースである。

航空学生のルートは、高校卒業後すぐ航空学生として入隊した場合は、早ければ  
二十歳で飛行訓練をはじめ、パイロットとしての第一歩を踏み出すことができる。

一般大学出の幹部候補生のコースは、入隊してからの昇進スピードが早い。航空  
学生が入隊後およそ六年かかって三等空尉に任官するのに比べ、幹部候補生のパイ  
ロット要員は、入隊後ほぼ一年で三等空尉となる。

幹部候補生は、航空学生コースのような基礎教育期間は省かれて、幹部候補生学  
校で約一年間の幹部教育を受け、そのうちフライトトレーニングを開始する。

杉浦研一は、奈良にある幹部候補生学校で、約十か月の一般幹部候補生の課程を  
終了して、約二ヶ月の隊付き教育のあと、地上準備課程に入るため、山口県の防府  
北基地を擁する十二飛行教育団に移った。

航空学生のコースでは、入隊後二年間は座学による基礎教育で、防衛学や自然科  
学、物理学、航空工学や英語などをみっちり教育されるが、一般幹部候補生につい  
ては、大学卒業者が対象なので、入隊時にはすでに素養は身につけているものと  
して、基礎教育期間は省かれる。

それでも英語は、フライトの必須条件なので、なんとしても身につけねばならず  
必死の思いで頑張った。大学時代に勉強をおざなりにしていたことを、ちよつぱり  
悔いたが、もともと頭が悪いわけでもなく、集中すればそれなりの成果があった。

第十二飛行教育団での地上準備課程では、飛行訓練前の事前準備から初等飛行訓  
練までカバーしている。

飛行訓練を直前に控えた学生は、約六ヶ月にわたり航空管制や英語学習など、航  
空の基本知識と技術を、身につけなければならぬし、航空機に関するあらゆる基  
礎知識はマスターしなければならなかった。

地上準備課程に進み二ヶ月もすると、当初の緊張から解き放たれて、週に一度の  
土、日曜日の休日が待ちどろしくなってきた。

特別訓練期間中なので、外出は許可されないが、気兼ねなく羽を伸ばせる日は貴  
重だった。

杉浦を含む十名の訓練生グループも、遅しく鍛え上げた躰をもてあましており、  
杉浦は、M大学を出てこのコースに入ってきた、森尾幸次とは特に気が合った。

森尾も大学では、体育会に所属する少林寺拳法部のキャプテンだった男で、お互  
い武道が共通の話題になり、やがて心の通い合う友になった。

森尾は、躰つきも杉浦とよく似ていて、筋肉質のひき締まった躰と、一見ハーフっぽい顔つきは、彼の祖父が北海道から東京に出てきて、埼玉県に落ち着いたとのことで、杉浦は森尾からこの話を聞いたとき、もしかしたら白系ロシアの血筋でも混じっているのではないかと、思ったくらいである。

森尾は、小学生の頃から父親のすすめもあって、近所の少林寺拳法の道場へ四歳以上の兄につれられて通い、M大学に入学したあとも、少林寺拳法部のキャプテンとして、四十人近い部員を束ねて、毎日の鍛練を欠かさなかった。

根っからの体育会系で、在学中から行く先は自衛隊ときめていたようで、日頃の鍛練もそのための準備と考えていたらしい。両親の反対を押し切って航空自衛官の道を選んだ森尾は、心から自衛隊の生活に溶け込んでいた。

二人とも酒が強く、外出が許可されるようになってから、ウイスキー二本ぐらい空けても、平然としていて乱れる様子もなかった。勿論、まだ訓練途中の学生隊員なので、アルコールの匂いをさせて基地に帰るのは憚られたが、土曜日の夜は特別外出の許可をとって、ホテルに外泊するので、日曜日の帰隊時間までにアルコールを抜いておけばよかった。

この当時、幹部自衛官の給与は、一般のサラリーマンと比べても、悪い方ではなく、それに基地に籠る日常なので小遣いが余り、たまの外出での小遣いには不自由しなかった。

黄金色の月が、中空から冴えざえとした光を放射している。人通りの少なくなった街中が、だいたい色に染まっただけで、街路樹の影が路上にくっきりとした模様を描いている。

杉浦の弾んだような足音が、彼の心を代弁するかのよう周囲に反響した。十月に入って周辺の山々では、そろそろ樹木の色を変えようとしていた。

今夜の外出はことに楽しめそうだった。厳しい訓練も山を越えて、いよいよ大空に乗り出せそうだという実感が胸に溢れ、浮き立つような思いを抑えかねていた。

以前、何回か行ったことのある、平和町のスナックで、森尾と落合う約束になっている。まだ自衛隊が同胞からも、うさん臭い目で見られている世相なので、アルコールを口にする場合は、幹部自衛官はつとめて、私服を着用するようにしていた。

訓練生グループ十人の仲間が、家賃を分担して借りている、アパートに立ち寄り

てスーツに着替えた杉浦は、約束の八時におくれないように、歩いて二十分ばかりのところにある、スナックに向かつて急いだ。

私服でカモフラージュしているつもりでも、どことなく野暮ったさが匂う。いつの間にか制服が似合う躰つきになっていて、一般のサラリーマンにはない、鋭い眼光と浅黒い顔色が際だっていた。

約束の時間に、十分近く遅刻して店にはいると、森尾は先に着いていてビールを飲んで待っていた。店内は、テーブル席が八つ、カウンターが十人分ぐらいの広さで、五十歳ぐらいに見えるマスターと、二十代前半の若い女性が三人動き回っていた。

航空学生らしい、空曹の襟章を着けた制服姿の若者が五人、奥のテーブルに陣取ってビールを飲んでいる。

森尾がウイスキーのボトルをオーダーしながら、前の席に座った杉浦に、「杉さん、彼等は成人式済んだのかな」

奥の席を目で追いながら言った。

「そうだな、基礎課程が終わって、地上準備課程に進んだ頃だから、二十歳にはなっているだろう」

二人は若い隊員を気遣っていた。そのあとは、アルコールが進むにつれ、話題はどうしても武道に関してのことだった。お互い女性に関心がないではなかったが、近くにある赤線には全く見向きもしなかった。

店の女の子たちも、議論に熱中している二人のテーブルには、遠慮して近寄ろうともせず、たまに、少なくなった氷を補充しにくるだけであった。

### 三

いつの間にか、店は満席になっていて、客の大半をしめる若者たちの熱気でむせ返るようになっていた。杉浦も森尾も酔いが適度にまわり、心身ともにリラックスしていた。そのとき、突然奥の席で大声で怒鳴る声とともに、ガチャンと瓶の割れる音が聞こえ、周囲の客が総立ちになった。

杉浦と森尾がそちらに目をやると、航空学生たちが飲んで席だった。その傍にビール瓶を下げた、一目で地まわりと見える、二人連れの男が立っただけで何かかわめき散らしているのがみえた。

航空学生の一人在、頭から血を流してテーブルに突っ伏している。思わず腰を浮

かせた杉浦を、森尾が手で制して、店の女の子を手招きして様子を聞くと、五人の隣の席にいたあの二人が、煩いから黙って飲めと、隊員にイチャモンをつけたらしい。一旦は黙り込んだ隊員が再び喋り出すと、二人組の中の一人が、いきなりビール瓶で殴りつけたとのことだった。

マスターが出ていって、二人組に頭を下げていたが、一人の男がものもいわずに殴り倒した。マスターは倒れたまま起き上がろうともしなかった。

杉浦たちの隣席にいる客が、

「紅竜会の木村だ。なんであんな奴を店に入れたんだろう」

驚いた顔で呟いた。その言葉を耳にした杉浦が、

「煩い人なんですか？」

何気ないふりで聞くと、

「煩いものにも、あいつは頭のイカれたボクサー崩れで、このあたりのシマを牛耳っているヤクザの幹部だ」

かかわり合いを恐れるように、そそくさと店を出ていった。続いて他の客たちも恐る恐る立ちあがり、支払いを済ませてあとにつづいた。店に残っている客は、揉めているグループを除いては、杉浦と森尾の二人だけになった。

女子店員たちは店の隅で身を寄せあっている。静まり返った店の中を、ヤクザの張りあげる、ドスの利いた声が支配した。

森尾が突然立ちあがり、彼等のテーブルに近づき、顔を伏せている隊員を横から覗きこんで、心配そうに声をかけた。

「おい君、救急車を呼ばなくて大丈夫か」

「大丈夫です、ちょっと休ませて貰えば良くなると思います」

その隊員は顔を伏せたまま、小声で答えた。

「この野郎！ 余計なお節介やくな。てめえ何様だ！」

男が森尾のスーツの襟をつかんで引つ張った。森尾がその手を逆に捻りあげた。

「あいたたつ！ はなせこの野郎、ぶち殺すぞ！」

もがきながら喚いた。

そのとき、もう片方の男が、いきなりビール瓶を森尾の後頭部めがけて振りおろした。間髪の差で森尾が躲すと、ビール瓶は勢い余ってテーブルを叩き、先が吹きとんで手に残った部分が、刃物のような断面を残し格好な得物になった。

五人の隊員は立ちあがって部屋の隅に退き、ことの成り行きを固唾を飲んで見守っている。睨み合っている森尾と二人組を見て、杉浦は格段の力の違いがわかり余

裕を感じた。五人の隊員に向かつて、「ここはいいから、君たちは早く帰隊しろ、それに怪我をしている隊員を早く手当してやれ」

落ち着いた口調で言った。その態度から隊員たちは、杉浦たちが何者なのかを感じとつたらしく、敬礼して、

「申し訳ありません、宜しく願います」

口々に言つて、店を出ていった。

二人組の男も、森尾の身のこなしから只ならぬものを感じたのか、睨み合つたまま手で出せなくなっていた。

そこへ表から驍の大きな男が二人、店に駆けこんできた。

「兄貴、その野郎か、イチャモンつけてるガキは！」

喚きながら、杉浦の前でいきなり短刀を引き抜いて、森尾に向かおうとした。

その短刀を握つた手に、杉浦の蹴りがとんだ。短刀は空中を飛び天井に突き刺さつた。もう一人の表から来た男が、

「この野郎！ しゃれた真似をしやがって……」

怒鳴りながら短刀を取り出した。

このとき森尾が、こちらに気を取られて振り向いたのを見たボクサー崩れが、すかさずストレートを繰り出したが、左腕でブロックした森尾が、右の正拳を相手の顔に叩き込んだ。——ゲオーツ……。異様な声をあげて、男は仰向けに倒れこんだ。

瞬間、短刀を腰に構えた男が杉浦めがけて突つ込み、もう一人が椅子を振り上げて叩きつけようとした。

咄嗟に杉浦は、短刀をもつ男の腕を、手加減なしに肘の外側から叩いた。——

バキッ！ と音が響き、男がドスを放り出して、右腕を抱えるようにして倒れこんだ。

その瞬間椅子が杉浦を襲つたが、左腕で受けると、椅子はばらばらになって飛び散つた。椅子を叩き付けた男は、平然としている杉浦を、化け物でもみるような目で見たあと、一目散に店を飛び出していった。

森尾を襲つた二人は、一人が床に倒れ顔を朱にそめて唸っており、片方は腰を抜かしたように、床にへたりこみ頭を抱えていた。マスターが、震えながら寄ってきて、

「お客さん済みません……」

と言つたようだが、震えていてよく聞き取れなかった。



そのとき店の表で、サイレンの音と共にパトカーが急停車し、四五人の警官が踏みこんできた。

#### 四

杉浦と森尾は、事情聴取のため防府北署に連行されて状況を聞かれた。相手がたとえヤクザとはいえ、二人の人間が重傷を負ったのでは、警察として事件にしないわけにはいかなかった。ただちに基地の警務隊に通報され担当者が駆けつけた。

取り調べは深夜にまで及んだが、身元がはつきりしていて、逃亡の恐れがないということで、警務隊が身柄を預かることになり、二人は一応基地に帰された。

翌日、基地側でも大問題となり、基地司令官をはじめ、関係者全員の緊急会議がひらかれたが、二人の処分については、一応警察側の結論待ちということになった。

杉浦も森尾も、別々の部屋で禁足状態におかれ、警務隊から再度の事情聴取を受けたが、二人とも自分の責任を主張して、潔い態度であった。

警察でも、相手が相手だし周囲の証言もあり、これまでも『紅竜会』には手を焼いていて、市民からの苦情が絶えず、手を打たなければと考えていた矢先なので、事件のあったスナックに対する営業妨害と、器物破損、脅迫行為など、適用できる限りの罪名で取り締まった。

聞けば、そのスナックに対して、『みかじめ料』を払えと、連日のような嫌がらせの最中だったらしい。

取り調べを担当した丸暴の刑事も、杉浦と森尾に対しては好意的で、なんとか正当防衛の線で押し切ろうとしているのが感じられた。

しかし、マスコミが騒ぎを大きくした、日頃ヤクザに対しては批判的な姿勢が一変して、このときとばかりに今回の事件を、自衛隊の横暴な体質が引き起こしたものと、喧嘩両成敗の論陣を張った。

警察も、二人の隊員の日常と、今回の事件の動機を新聞記者に説明し、同列には論じられないとして、二人をカバーしたが、マスコミの力には抗しきれなかった。

事件の結果は、正当防衛ということで治まったが、マスコミの攻勢にさらされている航空自衛隊としては、それで済ますわけにはいかなかった。

優秀な隊員、ことに不足しているパイロット要員として、成績の優秀な二人をこんな事件で失うのは、なんとしても惜しいと、基地司令官も再三本庁との間で協議

したが、結論的には残念だが、現在の世論には抗しがたいとして、二人を処罰してパイロット課程からははずし、静岡県のある術科学校への配置転換が決定した。

この当時は、マスコミも一般世論も、自衛隊といえば目の仇にした時代で、祖国の防衛をめざして研鑽する、純真で優秀な若者が、辛い思いで世間の冷たい視線に耐えていた……。

あるとき、航空自衛隊の航空機に関するマニュアルを手にいれた新聞記者が、当時航空自衛隊で使用していた、C46型輸送機に関する器材の欄を見て、DSPと略字が付されているのを発見して、航空自衛隊は、廃品(DISPOSAL)を米軍から購入して使用していると、大騒ぎしたことがある。

このDSPは、死蔵品(DEAD SUPPLY PROPERTY)の意味で、(この部品は、現在生産はされていないが、新品の在庫は十分にある)という説明であった。この頃、C46型輸送機を現役で使っているのは、日本と台湾だけであったが、価格のわりに安定した性能の良い輸送機だった。

航空自衛隊では、隊員の出張や移動には殆どC46を利用した。出張の多い隊員などは、たまには列車でゆつくり娑婆の空気でも吸いながらと、希望していたが、大抵はC46での行動が主だった。

昭和三十四年の二月五日、杉浦と森尾は二人一緒に、防府北基地を発進するC46の乗客となった。午前八時五十分、二人を欠いたチームメイトの八人が、訓練時間なのにも拘らず、特別に許可を得たのか、滑走路まで見送りに出ていた。

彼等はもうすでにフライトの訓練に入り、単独飛行訓練も終了したパイロットの卵たちである。杉浦も森尾も感無量だった、こころざし、なかば……、の思いも強かったが、二人には武道家としての誇りがあった。

何事も自らの責任と、全てを胸に秘め恬淡としていた。送る側は自分たちのリーダーのような二人を欠くことになって、複雑な心境だった。

森尾が杉浦の肩をつつき、機窓から指をさすので目をやると、あの航空学生が五人、教官らしい男と帽子をふっていた。事件の後、上官の説明によれば、危うく難を逃れた五人は、どれも優秀なパイロットの卵で、技能、学科ともに頭抜けたグループだったらしく、怪我をした隊員も、幸い大したことがなかったとのことで、この航空学生を指導している教官からも、心から感謝していると杉浦たちに伝えられた。

出発の前日、警務隊に挨拶にいった二人に隊長は、あれ以来ヤクザたちの動きが

## 第二章 浜松基地

一

なくなり、地元の商店街から感謝されていることと、地まわりたちが、——自衛隊員は、危険だから手を出すな……、ということ、これまで多かった、タカリや暴力行為の被害が皆無になったと、

「自分がこんなことをいつちやいけないが、君たちには礼を言いたいくらいだ。新しい任務での成功を祈っている……」

と、はなむけの言葉を送られ、自分たちの行為について、少しは救われる思いがした。

C46が滑走路に向かって、誘導路を進むと、八人の元チームメイトや航空学生たちが、一斉に帽子を振って別れを惜しんだ。

杉浦と森尾も機窓から手を振ってそれに答えた。機内には、二人の他に二十人ほどの隊員が搭乗していたが、皆好意の籠った目でこの光景を眺めていた。輸送機が高度を増すにつれ、群青の天空が、銀色に輝く機体を包み、果てしのない広がりを見せはじめた。

防府北基地から出発した輸送機、C46は、東京の立川基地を経由して浜松に向かい定刻の十四時十分に到着した。

到着後、指定されたBOQ（独身幹部宿舎）で荷を解いた二人は、直ちに術科学校長の中村一佐のところへ申告に出向いた。

術科学校は五階建の建物で、広大な基地の南側に位置する、一群のコンクリート造りの建物の中にある。

BOQから六、七分歩いてその建物の二階にある、校長室に到着した二人が、ドアをノックすると、中から「入れ……」と返事が聞こえた。

ドアを開けて入ると、正面の大きなデスクの向こう側に、大柄で眼鏡をかけた、一見英国紳士のような洗みのある風貌の男が、椅子に腰をおろしており、その傍に肩から銀色の参謀肩章のようなものを下げた、中肉中背の男が立っていた。

二人揃って机の前に直立し、杉浦が代表して、  
「申告いたします、杉浦三尉および森尾三尉は、命により本日術科学校に着任いたしました」

一等空佐の肩章をつけた中村校長が、椅子から立ち上がり、  
「おう来たか、待っていたぞ、こちらが第一科長の近藤三佐だ、宜しく頼むぞ」  
と言った後を、近藤三佐がひきとって、

「まあ楽にしろや、杉浦三尉と森尾三尉か、二人とも航空自衛隊の有名人になったな、パイロットコースは残念だったが、その情熱を隊員教育に向けてくれ、但し浜松は防府よりも質の悪いヤクザがごろごろしているので、夜の外出には注意してくれ」

言いながら、中村一佐と顔を見合わせて笑った。

杉浦は、通信コースの基礎課程についての教官を命じられ、森尾は整備コースの基礎課程の教官を拝命した。この術科学校には、自衛隊の下士官、隊員が受け持つ業務のあらゆる教育課程があり、基礎課程から専門課程までの技術習得のため、陸、海、空の隊員が、三ヶ月から六ヶ月の期間で、学習や技術の習得を競い合っている。

杉浦や森尾が担当するのは、基礎教養課程という、中学の上級ぐらいの教育で、隊員が専門課程に進む直前の、いわばトレーニングのようなもので、最初任命され

たとき、二人で顔を見合わせて、俺たちが教官か……と思案したことを思い出して苦笑した。

ただ、日々新しい発見があり、教えながら勉強するという、日常の繰り返しはじまった。

航空自衛隊の組織は、防衛庁長官の下に航空幕僚監部があり、このトップである航空幕僚長の統率下に、航空総隊、航空支援集団、航空教育集団、航空開発実験集団、それに補給本部とその他の部隊、機関が存在する。

航空総隊の傘下に、北部航空方面隊、中部航空方面隊、西部航空方面隊、南西航空混成団があり、それぞれ日本の空の防衛を担って実戦配備についている。

航空支援集団というのは、救難、輸送、保安管制、気象等を担当し、第一航空団や防府北基地にある第十二飛行教育団は、パイロットおよび整備、通信、補給等の航空要員を教育するための機関である。

その他に第四航空団（松島）、第十一飛行教育団（静浜）、第十三飛行教育団（芦屋）、航空教育隊（防府南）が、それぞれの課程を分担している。

浜松基地は、第一航空団の専属基地でもあるので、胸にウイングマークを誇らしげに着けたパイロットたちが、基地の中を闊歩していた。

彼等は約八ヶ月のT3練習機による、第一初級操縦課程から引き続き、約九ヶ月のT1機による第二初級操縦課程を習得した後、この第一航空団に移って来た。

そしていよいよジェット練習機のT4による、基本操縦課程をマスターして、晴れのウイングマークを胸にしたもので、実戦部隊への配備を待つ、もう一人前のパイロットたちであった。

杉浦も森尾も、憧れのウイングマークには手が届かなかったが、そのかわり左肩から下げた、教官肩章を誇りに思い、隊員の教育に情熱を傾けていた。

## 二

杉浦は幹部自衛官なので、基地の外に家を借りて居住することも許されてはいたが、あえて基地内にある、BOQ（独身幹部宿舎）住まいを続けた。規則づくめで、時間の制約を受ける窮屈さはあったが、娑婆における近所つきあいなどの煩わしさなどを考えると、この方が生活のリズムを崩さずに済むと思っていた。森尾も同じ考えで基地内生活をつづけている。

二人は、正規の課業外にプライベートな時間を利用して、同好会としての『武道

研究会』を創設したいと願いだした。基地司令官の石川一佐も、学校長の中村一佐も大賛成だった。

武術とは殺傷の技であり、人間が極度にまで追い詰められたところから、生き延びるために、究極の知恵と体力を働かせた手段の集積である。

日本の伝統的な武道は、相手を征服する技を磨きながら、心をも修行する方向に進み、いざという場合でも平常と変わらぬ心、憶せず怯まず平常心が得られるように鍛練をした。

武道には、伝統の『形』が継承され、その『形』を身につけるためには、絶え間のない修行が必要である。『形』の中には秘められた殺傷力があり、武道における『形』は、多くの技の中から選び抜かれた『技の結晶』である。

神道夢想流の稽古体系は、太刀に対する、杖を主としての六十四本の形と、十二本の剣術形（神道流）によって構成されている。

その技法の要点は、『突かば槍、払えば薙刀、持たば太刀、杖はかくにもはずれざりけり』、と伝書にうたわれ、打突の多様さを包含しているが、『形』としては、当流ほど無駄を削ぎ落としたものは他に類を見ない。

基本的な特徴として、『下から下から打ち上げよ』と口伝されるように、低い姿勢からの打ち上げが特性である。

少林寺拳法は、宗道臣が戦後に発展させた新興の体術で、拳による当て身技と、関節技を中心とした武術である。宗が若い頃中国に渡り、様々な拳法を学んだあと、崇山少林寺において技法を完成させ、昭和二十二年から香川県多度津で、『日本正統北派少林寺拳法会』として、少林寺拳法の指導を開始した。

この武道の基本は、無限の愛と底知れぬ力との両者を、一体的に重視する『力愛不二』の思想を身につけた人間像が、求められるものである。

『技』としては、防衛を『守即攻』として重視する、『守主攻従』を心とし、人を傷つけないとする『不殺活人』の精神が根本であった。

修行としての特徴は、『組み手主体』であるが、自由乱取も行い森尾は実践的な指導を主体にしていた。

いずれにしても、基本的な武道の真理を通じて、杉浦と森尾は共通の信念に裏づけられた親友である。

森尾は少林寺門下の逸材であり、杉浦と同じように学生時代には専門家への道をすすめられたが、あえて航空自衛隊の道を選んだものだった。

杉浦が、『夢想流杖術』と『正本流拳法』を主体として、基地内の体育館を使用して修練をはじめたところ、伝え聞いた隊員が、いきなり三十数名も入会を希望してきたので驚いた。森尾の『少林寺拳法』の会にも、およそ二十名の隊員が入会して修行をはじめた。この隊員たちは、杉浦と森尾の防府における噂を聞いているので、その当事者に対する興味があつたのかも知れない。

杉浦たちの同好会が発足してから、約三ヶ月がすぎるところには、修行に励む隊員たちの基本動作は、さすがに日頃鍛えられている若者たちだけあつて、さまになつてきた。

基地司令官の石川一佐も、むかし旧軍の海軍将校だつた頃、『杖術』に親しんだ時期があつたとのことで、時折体育館に顔を出して、修行に励む隊員たちを眺めては、日頃の敵ついで顔をほころばせていた。

入会した隊員たちの顔ぶれは、基地隊員から術科学校の各コースの学生、陸、海、空の隊員たちが含まれていて、彼等と一緒に汗を流す様子を見た、学校長の中村一佐は、——これこそ、日頃自分が提唱している、この学校を基盤としての三軍一体のチームワークづくりの実現だと、目を細めていた。

これまでも、基地内でのいろいろな催しものや、運動会などを通じて、各隊の融和を試みてきたが、陸、海、空の隊員の間では、日常生活における行動も、生きざまについても違いが見えた。

特に海上自衛官たちは、お互いに——船底一枚下は……の意識が強いせいか、結束力が堅い。

運動会で、三軍対抗の棒たおし競争などをすると、如実に現れた、彼等は集団の闘いに強かつた。陸上の隊員も、それなりに旺盛な闘争心を持つていたが、チームワークの面では、海上が勝っているように杉浦には感じられる。

航空の隊員は、どちらかといえば、理屈が先行する人間が多いような印象を受けたが、彼等は技術屋集団だという先入観が、あるせいかも知れない。

三方ヶ原に、木枯らしが吹きはじめた十一月、第一航空団に新しい教官が着任した。三田一佐といって、太平洋戦争のハワイ奇襲作戦にも従事したことのある、歴戦のパイロットであつた。

航空自衛隊に招請され、米国で長期にわたる新鋭機の搭乗訓練を経て、帰国してからは指導教官として、第一航空団に赴任したものだつた。

ある日、杉浦が課外で訓練している『杖術』の場所に、石川基地司令官と同行して三田一佐が現れた。杉浦が呼ばれ、石川司令官から三田一佐を紹介された。

三田一佐は、ゴマ塩の髪の毛を短く刈り込んだ、眼光鋭く制服姿が似合う、見るからに俊敏な、第一線のパイロットという印象で、胸にウイングマークがきらきらと輝いていた。

「君が杉浦三尉か、三田だ、よろしく」

目をじつと見ながら右手をさした。杉浦は慌てて握手をして、「はじめまして、宜しくお願ひいたします」

頭を下げたが、大きな暖かい手だつた。

「なるほど、父上の面影を思い出すな、良い面構えだ、一緒に飛べなくて残念だつたな」

笑いながら言った。石川司令官が傍から、

「俺も杉浦少佐には何度かお目にかかつたが、そうか、こんな顔だつたかね」

記憶をまざるような目つきで、杉浦の顔を見つめた。聞けば、杉浦がこの基地に配属されるとき、本庁からの資料で、杉浦の身元はすべてわかつており、彼が昔フリップンの海軍航空隊にいた、杉浦少佐の忘れ形見であることは、とうに承知していたらしかつた。杉浦は、その話を聞いて、石川一佐や三田一佐のなかに父親の面影を探り、胸がしめつけられるような思いに駆られていた。

三田一佐は、杉浦少佐の直接の部下だつたことがあるらしく、八王子で杖術の道場を構える山岡とは、現在でも親交が続いているとのことだつた。三田一佐は杉浦に、

「近いうち、街で一杯やろうや」

肩を叩いて、石川司令官と一緒に体育館を出ていった。

### 三

冬になると、基地のある三方ヶ原は殊の外冷え込む。この夜杉浦は、月に一度順番が回ってくる当直司令官として、夜間勤務についていた。もう十二月に入り寒さも厳しくなってきたので、ダルマストーブに火を入れてみると、警務隊から電話が入つた。

「当直司令ですか？ 私は警務隊の山本一尉ですが、ただ今浜松署から電話があらまして、今夜の最終バスの中で、女車掌に痴漢行為を働いた隊員がいたらしいん

です。車掌の訴えによるとセーラー服の集団だということで、調べたところ、その時間の帰業者は、お宅の海上の学生らしいので、至急調べて貰えませんか」

だいぶ焦った口振りだった。

なんでも、十時の門限に間に合う最終バスの中で、混雑に紛れて、女車掌のパンツに手を入れた隊員がいたらしく、車掌が大声あげたが、終点間際のため皆そのままだ下車してしまい、怒りの治まらない車掌が、運転手と一緒に浜松署に訴え出たらしい。

杉浦は直ちに正門の警衛所に赴き、最終バスで帰隊したと見られる隊員を確認しようとしたが、警衛所では、隊員の氏名を一々記録するわけがなく、単に外出許可証のみのチェックなので所属、氏名については把握しようがなかった。

ただ、門限近くの帰営隊員で該当するバスに乗っていたらしいのは、陸上の隊員五名、航空が七、八名、海上が十名ほどで、車掌がいうように、セーラー服の集団がいたのは事実らしい。

杉浦は当直室に引き返して、各内務班長に、門限近くに帰隊した隊員の氏名を報告させると共に、該当者の調査を命じた。もう真夜中になっていたが、民間人からの被害申し立てで、警察が動き出したのでは、一刻の猶予も赦されなかった。

該当するバスに乗っていた隊員の氏名は、直ちに判明して、当直室に呼び出して事情を訊いたが、陸上、航空の隊員たちからは、確かにそのような騒ぎは耳にしたが、海上のグループの辺りで起こったことだ。との証言で、海上自衛隊の十名に絞られ、翌日警務隊に引き継がれた。

一夜明けて、杉浦は当直司令を交替したが、自分の勤務中の出来事とあって、課業終了後、市内にある遠州バスの営業所へ、当事者である車掌を尋ねた。

昨夜のショックが原因で、車掌は搭乗勤務を休み営業所にいた。車掌の上司をまじえた場所での杉浦の謝罪に、彼女も幾分気持ちを和らげた様子だった。

聞くところによれば、最近、隊員のストレスから来る欲求不満のせいか、今回のような露骨な行為まではいかないにしろ、尻や胸を触られたりする被害はあとを断たず、女車掌たちはあの路線を嫌がっているとのことだった。

杉浦は、この様なことが今後二度と起こらないように努力すると言って、手をつけて謝罪し、自費で購入してきたお詫びの品を、車掌に手渡しして帰隊した。

翌日遠州バスでは、この路線がドル箱であることと、これだけ問題が大きくなれば、もう懲りて、この種の行為はなくなるだろうとの判断で、浜松署に出した告訴を取下げた。

警察側でも、自衛隊内部で厳しく取り締まって欲しいと、処置を基地側に委ねたので、問題が外部にまで広がることはなかった。

警務隊では、十名の海上自衛隊員を徹底的に締め上げて、もし犯人が名乗り出ないなら全員を退校処分にして、原隊復帰させると脅したところ、十人全員が自分がやったと名乗りをあげた。警務隊でも持て余し、最終の結論を術科学校にまかせた。

学校長をはじめとする各科長の緊急会議には、事件当夜の当直司令だった、杉浦三尉も参考人として同席した。会議では、みせしめのため全員を退校させ原隊に帰せ、という強硬意見もあった。彼等は原隊復帰になれば、当然懲罰の対象になり、将来の昇進問題に多大な影響が出るのは明らかである。最終的に参考意見を求められた杉浦は、

「自分の考えは、原隊復帰には反対であります。犯人の隊員はもう十分に反省し、二度と不祥事は起こさないと考えます。それに自分を犠牲にしてまでも同僚を庇う、九人の隊員の心情と、彼等が土壇場で見せたあのチームワークは、私も今後の参考にしたいと考えます。恐らく彼等はこの事件を人生の教訓として、立派な海上自衛官として成長することでしょう。そのためにも処罰の対象とすることは、赦してやっていただければと思います」

ここに集まっている科長たちはそれぞれが、旧軍の生き残りで、男の生きざまを大切にする考えの持ち主たちであった。

結論として衆議一決、無罪放免となった。但し、中村一佐からの意見で、懲罰のかわりにこの十名の容疑者隊員を、杉浦の道場に強制的に入会させ、鍛え直してくれとの要望となった。杉浦は自分で吐いた意見の事前、承知せざるを得なかった。

この頃、基地の一隅にある第三格納庫に、幽霊が出るという噂が広まりつつあった。この格納庫は、実動機のために使用されておらず、昨年事故を起こして大破した、T4型ジェット練習機の残骸が収納されている。

乗員は死亡したが、その亡霊が出るということで、基地隊員は夜間基地内におけるポイント数を数か所、交替で歩哨に立つきまりになっているが、第三格納庫の歩哨に立つことを皆嫌がっていた。

ある夜のこと、柔道の猛者を自認している日頃強気な幹部が、当直司令のとき、各歩哨のポイントを巡回していたが、問題の第三格納庫に近づいたのは、深夜の一時をすぎた頃だった、十二月に入った寒い夜なので、吐く息が白く見え、遮蔽物が

少いで殊更寒さが身にしみていた。

この夜歩哨に立ったのは、新隊員教育隊を終了して、この基地に配属されて間もない、十九歳の二等空士だった。先輩隊員たちから、この格納庫の由来を聞かされていて、早く交代時間がこないかと気もそぞろで、なるべく第三格納庫の方は見ないようにしていた。肩からは実弾を装着したカービン銃を下げていた。

当直司令が、歩哨隊員の度胸試しと茶目つ気を出して、格納庫の傍にある航空燃料の空き缶である、ドラム缶の集積場に隠れながら近付いたとき、突然ドカン、ドカンと銃声が沸いた。驚いた当直司令は立ち上がり、——なんだ、なんだーっ！と、大声をあげた。

それを聞いて肝を潰した歩哨が、無我夢中でカービン銃をぶつ放した。

その中の一弾が、当直司令の左腕を貫通した。ウワーツと叫び声をあげて倒れた声で、我に返った歩哨が、懐中電灯の明りで当直司令の腕章を確認し、間近にある緊急連絡用の電話に飛びついた。

知らせで駆け付けた副司令の通報で、基地内の救急車が出勤して、当直司令を近くの遠州病院に運び込んだ。

怪我は幸い大事に至らなかったが、なにしろ実戦経験のない戦後派の幹部なので、生まれてはじめての銃弾の洗礼に、ショックの方が大きかった。

後の原因調査で判明したことが、ドラム缶の空き缶が昼間の暖かさで膨脹し、夜の冷え込みで収縮した場合に発生する音らしく、それが銃声に聞こえたものらしい。

基地の幹部たちも、当直司令の生命に別条がないことを知って、胸をなで下ろしたが、このあと基地の方針で歩哨には、実弾を持たせないことになった。

この事件を聞いた杉浦は、こんな最新兵器に囲まれた環境のなかで、人間の弱さによって簡単に間違いが起きる……。どんなに強力な兵器も、最終的な人間の管理によっては、恐ろしいことになるかと心の底から考えた。

#### 四

慌ただしかった二年も、あと数日を残すばかりになっている。今日は二十四日、娑婆はクリスマス・イブで賑わっていた。

杉浦はこれまでの人生で、この日に特別な思い出があったことはない。もともと代々続いた仏教徒の家柄だったし、クリスマス・イブに縁のある若い女性と交際す

るするチャンスもなかった。この基地にきてからまだ森尾と一緒に、街に出かけたこともない。

二人とも、防府のあの事件以来、アルコールを口にすることを極力控えている。それに新しい職場や環境になじむ時間が必要なので、酒に酔うゆとりも忘れていた。

午後の課業が終わって教官室に戻った杉浦に、第一航空団の三田一佐から電話が入った。

「今夜、浜松駅の裏手にある小料理屋『しぐれ茶屋』で、仲間内の宴会があるので、時間が許せば参加しろ」

ぶっきらぼうな電話だった。そして出来れば森尾も誘ってこいといわれた。森尾に電話すると、「喜んで参加する」と嬉しそうな声だった。

七時に駅から近い、砂山町にある『しぐれ茶屋』と粋な名前の小料理屋に、二人で着くと、二階の座敷に通されたが、もう皆席についていた。

小料理屋といっても、一階が二十人ほど腰掛けられるカウンターと、六畳間の座敷が二つあり、二階が二十畳ぐらいの宴会場になっていて、料亭のような感じだったが、杉浦には料亭と小料理屋がどう違うのか、見分けがつかなかった。

正面に私服の三田一佐が、床の間を背にして、精悍な顔つきで胡座をかいており、その前面両側に、やはりスーツ姿のパイロットたちが、五人づつ坐っていた。

そしてパイロットたちが並ぶ最上席で、三田一佐の前の両側に二つ空席が用意されてあった。杉浦と森尾が入り口で正座し、正面の三田一佐やパイロットたちに挨拶すると、三田一佐が、

「おう来たか、まあここへ坐れや」

笑顔で二人を目の前の席に手招きした。戸惑っている二人を見て、パイロットたちが口々に、——遠慮なくどうぞ……とすすめた。

あまり遠慮してはかえって失礼になると、杉浦は森尾に目配せをして着席すると、三田一佐が、

「諸君もご存じと思うが、俺の右手が杉浦三尉、左側が森尾三尉だ。以前は君たちと同じコースだったが、ご承知の事件で術科学校の教官に配置換えになった。今夜は同じ仲間として一緒に飲もう」

紹介を兼ねて挨拶をすると、全員が拍手で歓迎した。

十人のパイロットのうち二名は、教官の三等空佐であったが、八名は杉浦たちより二、三期先輩のパイロットたちで二等空尉が三名、三等空尉が五名いた。

小柄で品のよい、五十歳がらみの女将の挨拶で宴会がはじまった。このとき、三人の若い女性が入ってきて、それぞれお酌をしながら回りはじめた。三人とも着物姿で、スタイルの良い現代娘たちである。

「女将、今夜はまた、えらい別嬪なねえさんたちを、揃えてくれたな」

三田一佐が女将に声をかけたが、芸妓にしては初々しすぎた。

「嫌ですわ、この子は陽子ですよ。そちらの二人は陽子の友達で、宴会の忙しいときだけ手伝ってくれている、東洋楽器の社員さんですよ」

笑いながら言った。三人の中でも一際目立つ、髪の毛をアップにした目の大きな女性が、

「おじさま暫く、陽子です、お忘れですか？」

三田一佐の正面に坐り、軽く睨んで見せた。

「おお陽子ちゃんだったのか、あまり綺麗になったんでわからなかった」

「まあ、それじゃ以前は相当酷かったみたいなの、おつしやりかたね」

負けずに応酬していた。二人の話を聞いていると、航空自衛隊が発足して、浜松基地を米軍と共用するようになった頃、防衛庁に招請されて入隊した三田一佐が、ここに派遣され約二年の在任中、この家の離れを借りて居住していたことがあり、その当時陽子は高校生だったらしい。

三田一佐と、二人の三佐はそれぞれ家庭持ちであったが、あとの八人は杉浦たちと同じ、まだ二十代の若者で、ひき締まった顔つきの見るからに使命感に溢れた好男子揃いだった。

三人娘も最初のうちは、眩しそうな目つきで隊員たちを眺めていたが、若いもの同士のこと、すぐ解け合って宴会は盛りあがった。中でも陽子は、杉浦に好意を抱いたらしく、三田一佐の傍を離れない振りをして、杉浦の近くにいたがった。勘の良い三田一佐が、陽子に、

「陽子ちゃん、この杉浦はまだ独身だよ。つき合ってみるかね」

冷やかすと、見るまに顔を赭らめ、酌をしようとして手を延ばしたお銚子を、思わずひっくり返した。慌てて取り上げようとしたが、酒が杉浦の膝を濡らした。

「あらっ、どうしましょ、杉浦さんおズボンお脱ぎになっつて」

動転した陽子が杉浦に言った。三田一佐がすかさず、

「なんだ、出会い早々ズボンを脱がすのか」

冷やかし言葉に一座がドツと沸いた。それで尚更あがった陽子は、オシボリを持つ手を宙に浮かせたまま、どうしてよいのか判らなくなり、着物の袂で顔を覆って

しまった。

「そんなに心配しないで下さい、そろそろクリーニングに出そうと思っていたズボンですから、気を遣わないで下さい」

杉浦が庇いながら、自分の前にあつたオシボリで、ズボンの酒をふきとり、ついでにテーブルと畳の酒も拭きとった。陽子が泣き出しそうな顔で、

「申しわけございません」

消え入りそうな声で言い、小走りで部屋を出ていった。女将が、「まったくしょうがない人ね」

言いながらあとを追った。

「いいな、若いってことは、君たちの青春に乾杯！」

三田一佐が音頭をとると、全員が一斉に盃をあげて乾杯をした。昭和三十四年のクリスマス・イブは、大空に青春を賭ける若者たちの熱気に溢れ、残された時間を惜しみながら暮れていった。

## 五

森尾は、クリスマス・イブに『しぐれ茶屋』で催された宴会で、アルバイトで宴席についた、城田育代と意気投合した。育代は陽子と高校が同級で、現在は東洋楽器に勤務している。

彼女はピアノの調律を職業としており、ピアノが得意なこともあって、週に二日松菱デパートの裏手にあるクラブで、ピアノ演奏のアルバイトもやっているとのことと、『しぐれ茶屋』の帰り際に、そつと森尾に名刺を渡して、—— 今月は二十八日が最終日なので是非遊びにきてと誘った。

杉浦にだけは話しておこうと考えたが、なんだか自分がモテたことをひけらかすような気がして、話し難かった。

二十八日、当直司令には一応外泊の届けを出して、夕方の六時に外出した。バスに乗り松菱デパートに近い街の中心部に出ると、七時近くになつていたが、今夜は師走にしては暖かでコートも要らないほどだった。アルコールを飲む前に、空き腹を満たしておこうと考え辺りを見回すと、浜松名物の鰻屋の看板が目についたので入った。久し振りのような重は、基地の食堂では味わえない旨さだった。浜松に来てからは、防府の訓練生のときのように、連日太陽の直射日光を浴びながらの生活ではなく、宿舍から教官室と体育館への往復だけなので、すっかり生来の色白な顔

色に戻っていた。

着痩せして見える躰つきに、濃紺のスーツと同系色のコートが映えて、街中で出会う娘たちが思わず振り返るほどで、いつも制服で身を固めている男とは、想像もできなかっただろう。

約束の八時に、教えられたクラブ『シャンゼリゼ』に入ると、目敏く見つけた育代が、飛びつくようにして出迎えた。

育代は、先日『しぐれ茶屋』で会ったときの和服姿とは一変して、水色のワンピース姿で、髪の毛もアップをほどいて巻髪にしており、印象が全く違って見えた。いつもは、演奏をはじめると午後九時ぎりぎりに出勤するのだが、今夜はひよつとすると森尾が来てくれるかもしれないと考え、早く出てきたのだそうだ。

ママに、——わたしの友達よ……と紹介され、ピアノに近いカウンターに腰を下ろしてビールを注文し、育代と乾杯をした。

育代に紹介されたママは、森尾が自衛隊員だと自己紹介しても、信じられないような顔をしていた。

ウイスキーの水割りに切り換えた森尾が、程よい気持ちになりかけた頃、育代の演奏が始まった。この店の名が『シャンゼリゼ』というように、シャンソンをスタンダード・ナンバーとするピアノの演奏だった。

聞くとところによると、ママが以前プロのシャンソン歌手だったらしく、このような演出をしているのだそうだ

——オ、シャンゼリゼ……にはじまって、三曲ばかりつづけて

育代の演奏が流れた。弾き慣れている自信のあるタッチで、楽しそうに鍵盤を叩いていた。

日本ではシャンソンというと、すぐにアコデイオンを連想する人が多い。シャンソンの伴奏はアコデイオンと決まっているわけではないが、昔は多用された。最近のシャンソニエは、ピアノでの伴奏が多くなっている。

そのうちにママが『夕暮れのワルツ』を唄った。さすがに元プロの唄だった。その後常連らしい客が、『枯れ葉』を唄ったが、なかなか手慣れた唄いぶりで抵抗なく聴けた。ママが近付いてきて、「育代ちゃんのお友達なんだから、唄えるんじゃない？ なにか一曲お願いしたいわ」

新規の客に対するお追従めいた口振りだった。物怖じしない森尾が、酔も手伝わ

て、「じゃあママに珍しい歌を聴かせて貰ったので、『サンジャンの恋人』にトライし

て見ようかな」

と言ったのでママは驚いた。

『夕暮れのワルツ』も『サンジャンの恋人』も、一九五〇年代につくられた曲で、現代でも名曲として知られているが、プロか、余程の通でないとい、あまり唄われな

いメロディだった。育代も驚いた表情で、「このメロディをお店で聴くのははじめてだわ、わたしも好きなので、ピアノでよく練習したことはあるけれど」

言いながらイントロをはじめた。森尾は育代の傍に立って、マイクに向かい原語で唄いはじめた。最初のうちは、くすぐったそうな顔つきでいた育代の顔が、途中から真剣なまなざしになり、ピアノを弾く手にも力が籠った。

森尾の唄は本格的だった。大学時代、少林寺拳法の仲間にシャンソンを本業とする学生がいて、暇なとき森尾に手ほどきしてくれた時期があった。森尾はこのメロディが醸し出す、都会的で物憂い感覚に魅せられて、現在でも基地内にあるBOQの自室に、シャンソンのレコードを何枚か置いて、独身の夜の退屈さを紛らわしている。垢抜けた雰囲気森尾が、原語で唄うシャンソンは素人ばなれがしていた。唄い終わると、店の半分ぐらいを埋めた二十人程の客が、大拍手で——アンコールと叫んでいた。

ママが目丸くしていたが、育代もショックを受けた様子で、次の演奏に移るまで暫く時間がかかった。

誰もが航空自衛隊員で、しかも武道家とは想像も出来なかったであろう。ママが「もう一曲なにか……」とねだったが、

「いや、またこの次に」と席に戻り、水割りのお替わりを注文した。今夜は外泊の届けを出してきたので、店に入る前、駅前ワールドホテルに電話をして、宿泊の予約をしておいた。

十一時になり、育代が帰る時間になったので、会計を済ませて一緒に店を出た。ママの配慮なのかスナックよりも安かった。育代がどうしても、もう一軒つきあつてというのでお供をすると、ワールドホテルの裏手にあるスナックだった。

育代の先輩だと紹介された、四十年配のママは大歓迎の素振りで、「お似合いのカップルね」

真顔で言って、育代を喜ばせた。改めて飲み直した森尾は、予約してあるホテルが目の前なので、安心してグラスを傾けた。育代も仕事から解放された後なので、結構お代わりをしていた。



そして酔ったせいかな家庭の話をはじめ、昼夜働いているのは、父親が車の事故で一昨年急死した後、病弱な母親を抱え、二歳年上の姉と二人で頑張っているためだと話した。

育代からは、話の内容のような湿っぽさは感じられず、むしろ現在の境遇を楽しんでいるような口振りで、森尾はこの人は素直で、大らかな性格なんだろうかと、睫毛の長い色白な育代の顔を見つめながら聞いていた。

育代は、心の中で森尾に対する感情が一気に吹き出した感じに囚われていた。そして帰り道ホテルの前で、別れ際に伸び上がってキスを求めた。森尾は軽く唇を合わせて、

「お休みなさい、気をつけて帰って下さい」  
手を上げて、ホテルに入ってしまった。

### 第三章 嗚呼 三田一佐

一

第一航空団で使用している主力機は、T4T型ジェット練習機である。練習機としては優秀な性能を持っていたが、プロペラ機と違って電子機器のかたまりのようなジェット機では、パイロットの技倆だけでは、カバーできない事故も起きる。

昭和三十五年二月の中旬、第一航空団の総合飛行訓練で、午前十時に基地を飛び立つた、三田一佐を長とする編隊が、予定の訓練を終えて帰還する途中、間もなく浜松の上空に達するというとき、三田一佐が搭乗する先頭機がエンジンの故障で、フレイム・アウト（エンジン停止）の状態になった。

米軍のマニュアルでは、この状態になった場合、パイロットは直ちに緊急離脱装置を作動させて、パラシュート降下による、身の安全を優先することになっているが、航空自衛隊のパイロットは、脚下はわが祖国、それに人家もある、それらを守るための訓練であれば、——後は野となれ、山となれ……式の緊急処置はなんとしても避けたかった。

三田一佐は事故発生するとき、直ちに離脱装置のボタンを押せば、助かることはわかっていたが、事故機を海に向けて操縦したため、恐らく脱出高度が間に合わなくなり、遠州灘に突っ込んだものと想定された。

三田一佐はトラブル発生時、僚機に、

「俺は心配ない、海にもついでいくから君たちはこのまま帰れ」

と命令し、隊長機に行く先確認のため追尾しようとするのをやめさせ、単独で海に向かったらしい。

訓練の終わり間際で、各機とも燃料が残り少く、隊長機の後を追ったなら二重のトラブルが発生したものと考えられた。僚機が直ちに基地に連絡して、常に二十四時間態勢で出勤に備えている、航空救難隊の各種救援機が搜索に飛び立ち、予測される海域をくまなく探したが、夜になっても機体は発見されず、漂流物も見当たらなかった。

杉浦は、ちょうど午後の課業が十五時に終了したので、教官室に戻ると、部屋の様子がいいつもと違い慌ただしい感じで、教官たちが三々五々顔を寄せ合って話込んでいた。

「なにか、あつたのですか」

杉浦が聞くと、科長の近藤三佐が、

「君と親しい三田一佐が、行方不明なんだ」

沈痛な面持ちで言った。

「えっ、事故なんですか？」

驚いて問い返すと、

「うん、今日の訓練フライトで、帰投寸前にトラブルが発生し、事故機を海上に持っていたんだが、そのあと探しても見つからないんだ」

語尾が震えていた。頭を殴られたようなショックで杉浦は、暫く呆然となった。

この後、森尾からも電話があり、

「なんとか無事でおられればよいが」と心配そうだった。

救難航空隊でも、救命胴衣を着けているので、もしかしたら漂流していないかと、出来る限りの可動機を動員して、捜索に努めたが、二日、三日すぎても破片はおろか、漂流物も見当たらなかった。

知らせを受けて駆けつけた三田一佐夫人が、夫が行方不明になった遠州灘を見たというので、基地隊員が、浜松の海辺にある『中田島の砂丘』を案内すると、夫人は二月中旬の冷たい海水に、素足を浸し、

「あなた、頑張つてーっ、私も一緒に頑張るからーっ……」

周囲を憚る様子もなく、悲壮な声で呼び続けた。悲鳴にも似た声は、空しく海に吸いこまれていった。戦時中からこれまで、多忙な夫の日常に耐え続け、二人だけの老後を楽しみにしていたのに……。

基地全体が、三田一佐の奇跡的な生還を祈っているうちに、一ヶ月がすぎた。そして三月の下旬、遠州灘で操業中だった、漁船のサツカケ網に、機体がひっ掛かったとの通報が基地に入り、中から三田一佐の遺骸が引き上げられた。遺骸は中田島の砂丘に安置され、警察の検死を待った。

杉浦のところ、三田一佐の部下から連絡があり、今夜とりあえず中田島の砂丘で、お通夜をしながらご遺体をお守りするので、宜しかったらご一緒に、と言ってきた。

杉浦が直ちに森尾に連絡したところ、

「是非同行したい」

重苦しい声が返ってきた。

二人は、深夜に出発するトラックに同乗して、中田島の砂丘に向った。車が砂丘

に近づくと、前方で朱々と、篝火が天を焦がす勢いで燃えていた。

車が停まり、杉浦たちが篝火めざして近寄ると、傍にゴザが敷かれ、その上に毛布をかけられた三田一佐の遺骸が安置されてあった。先着の隊員や、警務隊の隊員たちが約十名、みな臉を腫らして篝火を見つめている中で、杉浦と同行した全員が、遺体に向けて敬礼をした。三田一佐の部下の一人が、

「ご遺体、拝ませて頂いて宜しいでしょうか？」

警務隊員に聞くと、

「結構ですが、見ない方がよいのじゃないですか」

気の進まないような素振りと言った。隊員たちがどうしてもお別れを言いたいと、懇願すると黙って毛布をはぐった。

一目見た隊員たちは、アツと言つて思わず二、三步あとずさつた。杉浦も森尾も息を呑んで棒立ちになった。三田一佐と思われる遺骸は、魚にでもつつかれたのか、顔の半分が白骨化していた。

そして胸にはウイングマークと、三田一佐と書かれたネームプレートが確認され、腕にはめた完全防水の航空時計が、辺りの静寂さの中で、チツ、チツと無心で時を刻んでいる。かつての精悍で男らしい風貌が、変わり果てた、物言わぬ骸として横たわっていた。無残だった。

誰からともなく、浜松航空隊の歌が静かに流れはじめた。『うしお渦巻く遠州灘に、ターボジェットの爆音高く……』、歌は次第に悲しみの合唱となり、篝火の朱い炎と共に、満天の星空めがけて舞い上がっていった。

砂丘に打ち寄せる波頭が、篝火に白々と写し出され、繰り返す潮騒しほざいの音が、三田一佐の鎮魂を、共に祈っているかのようであった。

## 二

浜松基地内に建つ学校群や隊舎の中心に、国旗掲揚台がある。毎朝八時の朝礼のとき日の丸が、ポールの頂点に掲げられ、風にはためきながら隊員たちの一日を見守っているが、ここどころ国旗は、ポールの中程で止まっている。

半旗……、半旗は弔意の表現である。基地の隊員全体の悲しみの象徴でもあった。昨年末のクリスマス・イブに、三田一佐たちと過ぎ行く年を惜しんだ『しぐれ茶屋』

で三田一佐の追悼を催したいとのことで、杉浦も森尾と一緒に参加した。指示された夕刻の六時に着くと、昨年末と同じ顔ぶれだったが、唯一つだけ主の

いない正面の席には、黒いリボンで飾られた三田一佐の遺影が、みんなに微笑みかけていた。臉を腫らした女将が喪服で挨拶した後、教官の今井三佐が音頭をとり、「三田空将の安らかな眠りを祈って乾杯しよう、今夜は大いに酔ってくれ、その方が三田空将も喜ばれるだろう」

盃を高く掲げると、みなそれに倣った。

殉職による二階級特進で、三田一佐は空将に昇進したが、遺影は一佐の肩章のままだった。陽子が、二人の若い女性と黒のツーピース姿で部屋に入り、お酌をはじめた。陽子以外の女性をはじめて見る顔だった。陽子が言いわけのように、「去年手伝って貰った二人は、今夜忙しいので来られないって、残念がついていました」

森尾に意味ありげな視線を送りながら言った。杉浦が、

「それは残念、あの子にもう一度会いたかった」

冗談口調で言うと、

「杉浦さん、今日はなんの集まりと思つていらつしやるの、不謹慎だわ」

陽子がむきになった。杉浦は思わず肩をすくめ、

「申し訳ない」と頭を下げた。今井三佐が笑いながら陽子を手で制して、

「みんな、沈んでいたんじや三田空将が喜ばないぞ、どんどん騒げ、遠慮するな」

その言葉に反して、席は今一つ盛り上がらなかつた。

九時にお開きとなり、パイロットたちはタクシーを呼び、三台に分乗して基地に帰つていった。

別行動の杉浦と森尾が店を出ると、陽子が表で待つていた。

「お二人とも、まだお時間は宜しいの？」

杉浦の顔を見つめながら聞いた、二人とも今夜は外泊の予定なので、——時間がありますけれど……と返事をする、もう一軒つきあつて欲しい、とのことだった。

陽子がまた杉浦に向つて、

「どうしてあれ以来いらして下さらなかつたの？ お正月なんか、暮れからお休みになるので、一度くらいお会いできるのかと、楽しみにしていましたのに」

恨めしそうなまなざしで、見つめた。

「申しわけない、母親がどうしても言うので、久し振りに東京の実家に帰つていたので」

「そうだったんですか、でも行き帰りに、少しぐらいの時間は取れなかつたのかしら」

「これからは、必ず寄らせていただきます」

杉浦はなじられても、陽子の気持ちに伝わってくるので、悪い気はしなかつた。傍で森尾がニヤつきながら聞いていた。

自衛官は特別職の公務員であり、二十四時間勤務が建て前だが、浜松基地は教育部隊なので正月の休暇は、なるべく隊員を故郷に帰し、家族との触れ合いを持たせるようにしている。

杉浦も森尾も、久し振りに実家に帰り、待ちわびていた両親や兄弟たちと共に、一週間にわたる団欒を満喫してきた。

近いところだけど、タクシーで行こうと陽子が言うので、通りがかりの車を拾つて乗り込むと、陽子の案内で着いたところは、松菱デパートの横にある、『クラブ・シャンゼリゼ』と書かれた看板の前だった。

一瞬森尾が、まじ、という顔をした。

「クラブか、俺たちには場違いじゃないか」

杉浦が意外な顔で言った。これまでクラブに入ったことなどない。「ここはいいの、私の知りあいなので心配ないから、ついていらして」

先になって店に入つていった。杉浦も仕方なく森尾を促して後につづいた。

玄関ホールの突き当たりにあるドアを、陽子が開けると、どつと賑やかなざわめきに包まれ、ピアノの音がその間を縫うように響いていた。

ママらしい女性が出てきて、陽子に、

「いらつしやい、お待ちしましたわ」と言いながら森尾に目を向け、

「森尾さん、随分お見限りね」

軽く睨んで見せた。

「おい、どうなつているんだよ、はじめてじゃないんか」

杉浦が驚いて言うと、森尾が頭をかきながら、

「実は昨年末、あの子に誘われて一度来たことがあるんだよ」

ピアノを弾いている、育代を指さした。育代がピアノを弾きながらこちらを見て、嬉しそうに頭を下げた。

「なんとまた、素早いことで」

杉浦が森尾に驚きの表情を見せた。ママがピアノに近い席を準備させて、——どうぞと、手まねきしていた。

席に着いた三人は、ウイスキーのボトルを注文して、飲み始めたが、ママの言いつけによるものか、このテーブルにホステスたちは近寄らなかつた。陽子が飲みながら杉浦に向い、

「森尾さんを見習いなさい、クリスマス・イブの会合があつた日のあと、ちゃんと育代には逢いに来ているのよ」

冗談めかして言った。杉浦は答えようがないので苦笑していた。「杉浦さんて勘が鈍いのね、女性の気持ちも汲み取れないで、よく教官が勤まるわね」

追い討ちをかけられてしまった。陽子は大方アルコールが回りはじめた様子だつた。

「森尾、君は育代さんと交際をはじめたのか？」

「いや、まだ交際という程のものじゃないんだよ、とにかく昨年末の二十八日にこの店に誘われて、顔を出しただけだ」

話を聞いていた陽子が、

「あら、育代の話と大分違うわね、育代はもう森尾さんの恋人のつもりよ」  
言っているところへ、休憩時間になつた育代が参加した。

「森尾さんご免なさい、今夜行けなくて。でも寄つて戴いて嬉しいわ、杉浦さんでしたわね、わざわざお越し願ひまして有り難うございます」

杉浦は、昨年末に会つたときの印象が薄くて、よく覚えていなかったが、改めて見る育代は、色白で睫の長い、涼やかな瞳をした女性だつた。

そこへママがやつて来たので、杉浦が紹介された。

「航空自衛隊の幹部さんで、ハンサム揃いなね。それに森尾さんのシャンソン、あれはアマチュアの唄じゃないわね」

ママの言葉に、杉浦が、

「えつ、シャンソンを唄うのか、はじめて聞いたな」

びつくりしたように森尾を見ると、森尾は首をすくめて、

「この間は、ちよつと酔つていたものだから……」

追及がはじまりそうなので、弱つた顔つきだつた。

「じゃあ俺に内緒だつた罰だ。今夜も唄わないと許さないぞ」

杉浦が言つたので、ママを加えた三人の女性が拍手で賛成をした。「参つたな、じゃあ後で」

綺麗な女性たちと飲む酒は、特別だつた。そして二人とも、若い女性から面と向つて想いをぶつけられたのは、はじめての経験だつた。杉浦は、女性が積極的な

は、浜松の土地柄のせいかなと考えた。

育代の演奏が再開されて、やがて『サンジャンの恋人』のイントロがはじまつた。ママがマイクを持つて森尾が近づくのを待った。森尾が立つていつて、唄いはじめる時、一瞬、客席のざわめきが途絶えた。杉浦は森尾の唄にも驚いたが、ピアノに凭れるようにして唄う彼と、うっとりとした表情で伴奏する育代の姿は、完全に心が通いあつて見えるように見え、「決まりだな……」杉浦は呟いた。

「ねえ、杉浦さんもなにか唄つて下さらない？」

陽子の声で我に返つたが、杉浦はこれまで人前で唄つたことなどない。

「いや僕は唄は苦手です。それより陽子さんお願いします」

言われた陽子も、

「私も唄は駄目、それじゃあ今夜は三田のおじさまを偲んで、シャンソンを鑑賞する夜にしましょう」

話ながら、杉浦の前にあるグラスと自分のグラスを交換して、飲みかけの水割りを一気に飲み干した。

「私のも飲んで」

催促されて杉浦は戸惑つたが、陽子に目で促されて飲み干した。「はい、三三九度終了」

アツと思つた途端、血圧が一気に上昇したような気分になつた。

ピアノのところでは、客席からのアンコールと、ママと育代にせがまれて、森尾が二曲目の『ラ・メール』を唄いはじめた。唄は、前のものより更に素晴らしかつた。杉浦たちの席で聴いていたママが一言、「負けそう……」と言つて、唄い終わつた森尾に大きな拍手を送つた。戻つてきた森尾に杉浦が、

「いや驚いたよ、こんな芸を持つていたとはな、少林寺と並べてシャンソン教室の看板も出せよ」

本当に驚いた口振りで言つた。森尾は、

「歌も、たまにはいいものだよ」

照れた表情で言つた。そして、

「武道もリズム、歌もリズムだ。きつと杉浦も唄えようまいと思うよ。運動神経と唄は直接関係があるみたいだから」

真顔で言つた。杉浦は——その説だけはどうもと思つた。

青春<sup>はる</sup>真つ盛りな夜のひとときは、束の間に過ぎた。十一時に演奏が終わり、閉店の十二時まで一緒に飲んだ育代も、陽子も、相当酔つたみたいだつた。

この夜、陽子を杉浦が自宅までタクシーで送り、育代は森尾が送り届けた。十二時半に杉浦が予約してあるワールド・ホテルの部屋に入ると、同じ頃森尾も隣室に着いた。二人とも紳士を自認している。そしてそれが当然なことだと思っていた。

### 三

城田育代は浜松の生まれで、家は浜松城址のある元浜町にある。ホンマ・モーターに技術者として勤める父親と、専業主婦である母親との間に、三歳齡上の姉に次いで二女として生まれ、典型的な中流家庭の平和な環境で育った。

育代が東京の音楽学校で、後一年で卒業という早春の夜、父親が酒酔い運転中の事故で、停車していた車に突っ込み、中小企業の経営者だった相手を死亡させ、自分も死んだ。

生真面目で働き者だった父親には考えられない事故だったが、起きたことは事実であった。

事故の補償で、父親が遺した財産は殆どなくなつたが、住む家だけは残つた。事故のショックで寝込んだ母親は、もともとあまり健康な体質でなく、寝たり起きたりの生活が続ぎ、姉と手をとりあつて、生活費と母親の医療費を稼ぐため、学校を中途退学した育代が東洋楽器に勤めて、ピアノの調律の仕事をはじめたものだった。

最近クラブで、ピアノ伴奏のアルバイトもするようになったが、生来陽気な性格の育代には、卑屈な影など少しも見えなかつた。

陽子と同級生だった高校時代も、二人とも同じように男の子たちからちやほやされて、大分つき纏われたこともあつたが、陽子とスクラムを組んで切り抜けていた。そのため男の子たちから——あいつらはレスだ……と言われていたこともあつた。

東京の学校でも、ピアノ科の男子学生から何回もプロポーズされたが、気持ちが決まらないでいるうちに、父親が死んで浜松に戻ってきた。

その後は、毎日の生活に追われて、男性に関心を持つ暇もなかつたが、森尾に会つて、いつべんに心の中の蕾が開いてしまった。森尾の外見は、ハーフっぽい気障な男に見えたが、中身は最近の若い男にはない男っぽい気性を持っている。まだ三度しか会っていないのに、身も心も吸い取られそうな感覚に囚われていた。

けれど森尾は、育代が密かに期待しているようなスピードでは、接近してこなかった。恐らく男だけの集団で生きてきたので、女性の扱いに慣れていないのだろうと、育代は解釈していた。

また浜松に桜の季節が巡ってきた。『しぐれ茶屋』で小宴会があり、アルバイトに出かけた育代は、宴会終了後の十時を過ぎてから、陽子を誘つてワールド・ホテルの最上階にある、展望レストランに行った。

四方がガラス窓で、浜松市内から中田島の砂丘を経て、遙か遠州灘まで眺められる素晴らしい雰囲気のお店だった。午前二時まで営業をしているらしい。育代が、「ねえ陽子、あれから杉浦さんお店に来た？」

訊いてみると、

「それが来ないのよ、あいつ、私に気がないのかしら」

憂鬱そうな口振りだった。

「そんなことないわよ、杉浦さんの態度見ていて、陽子にお熱なのは見え見えだよ」

「それより森尾さんはどうなのよ」

「それがねえ、はつきりしないの。わたしには魅力がないのかな」

「どうなんでしょうね、あの人たち、ちよつと普通の男性とは違うわよね、この間なんかあの後、家まで送ってくれたのはいいんだけど、手も握ってくれないのよ。ママに話したら、それでいいのよ、大切にしなさいって言われたわ」

「わたしもそうなの、タクシーで家に着く前、あの人肩に頭をつけて、キスしてくれるのを待っていたんだけど、——今夜は大変だったねって、頭を撫でてくれただけだったわ……」

航空自衛隊の幹部は、女性に接触してはいけないという規則でもあるのかしらと、二人は冗談めかして笑い合ったが、遙か彼方の、遠州灘に浮かぶ幻想的な漁り火を、森尾と一緒に眺めたいと、育代は胸の熱くなるような思いを抑えかねていた。

陽子の母親、『しぐれ茶屋』の女将である智世は、昔若い頃浜松市内の紡績工場に、事務員として勤めていたとき、同じ総務課にいた長岡一郎に見染められて恋仲になったが、長岡が旧家の跡取りだったことで結婚を反対され、二人だけで市内に一軒家を借りて生活をはじめた。

陽子が生まれて間もなく、一郎が肺結核にかかっていることがわかり、治療のた

め長期入院することになってしまった。そんなこともあって智世は、磐田郡で農業を営む実家に陽子を連れて帰り、農業の手伝いをしながら育てていたが、そのうち太平洋戦争がはじまった。

一郎は病気のため兵役を免れて、療養を続けているうち次第に快方に向い、戦争が終盤にさしかかる頃は、一郎の実家でも智世に対する態度が軟化して、入籍を許し陽子も認知された。

近いうち、医師から許可がおりたら、待望の親子三人での生活ができると、準備をはじめた矢先、米軍による爆撃と艦砲射撃のため、浜松市内にあった長岡の家は灰燼に帰し全滅した。一郎もそのとき実家について犠牲となった。

陽子はまだ小学生で、父親は市内の病院に結核で入院しているため、自由に面会もできず、そのため父親の顔もよく覚えていないくらいであった。

智世は、砂山町にあった約七百坪の長岡家の土地を相続し、終戦後焼け跡を整理して、二百坪だけ残して売り払い、現在の『しぐれ茶屋』をはじめたものだった。

智世は、三田隆と知り合ったことで、自衛隊員を高く評価していた。昭和三十年頃、まだ店が軌道に乗っていないので、家計の足しにと、知人の紹介で航空自衛隊の幹部だという三田に離れを貸した。なんでも旧海軍の将校だったとのことで、女所帯の『しぐれ茶屋』でも、心配のない人物だという、知人の推薦で住んで貰ったが、三田はまったく古風な、武士のような気質の男だった。

東京の家に、子供のいない妻を一人残しての単身赴任だったが、浜松での日常生活における起居振る舞いは、素っ気ない程すつきりしていた。

智世とてまだ女盛り、そんな三田と接しているうちに、思慕の情が沸くこともあったが、三田の毅然とした生活態度の中で、心から信頼しあえる仲になっていた。

最近陽子が、航空自衛隊員を好きになりそうなのがわかってはいるが、歓迎だった。ただパイロットだけは困ると考えていた。なんとしても陽子には幸せな、安定した結婚をして欲しかった。自分が望み得なかつた夢を、陽子には掴んで貰いたかった。

陽子は、二十歳で浜松市内にある短大を卒業したが、母親のお陰でなに不自由のない学生生活を送り、勉強よりも花嫁修行のつもりでいた。

市内のホンマ・モーターに勤めている、若いサラリーマンとも交際してみたが、どうにも物足りなくて自分から別れ、中途半端な気持ちでいるときに、店で杉浦と出会ったものだった。

以前交際したのが、現代っ子の青年で決して悪い人間ではなかったが、なにか感覚的に軽すぎて、将来を託す気になれなかった。

けれど杉浦は普通の若者たちと、ひと味もふた味も違う感じだった。そして今は杉浦という男に酔ってしまっている。自分でもどうかしていると思うことがあるが、どうにもならなかった。

## 第四章 抗争のはしり

一

かつてヤクザは、ある種の財閥にとつて、利潤追求過程での協力者であった。また政治の世界でも、反対勢力を圧力で屈服させる影の軍団としての利用価値があり、裏社会での選挙協力者でもあった。だが敗戦により、独占資本は分散してしまい、やがて近代的な労務管理の時代になり、スト破りなどの必要もなくなつて、警察力の増強、自衛隊の治安出動体制が確立し、自民党の党人派の衰退と共に、ヤクザの踊る舞台が一気に消滅した。

彼等も、国内情勢や国際経済の変化により、近代化の名のもとに遣い捨てられたもので、いまではヤクザは死語となり、暴力団と呼ばれる完全なアウトローになつた。

浜松では、暴力団の二大勢力が、復活しつつある工業都市の利潤を巡つて、勢力拡大に凌ぎを削つていた。西からの天盛会、東からの共和連合系の小田組である。

浜松は、第二次大戦中、航空基地や軍需工場が集中していたので、数十回にわたる爆撃と艦砲射撃を受け、市内の大部分が灰燼に帰した。

それでも戦後、市民の努力によつて復興をとげ、織物、楽器、オートバイ及び軽自動車等の産業が軌道に乗り始めていた。また、それらの従業員を顧客とした飲食街が、すぎまじい勢いで増え、又とない暴力団の温床になつている。

最近では、浜松基地に若い隊員の数が増え、彼等が夜の街に落とす金額もばかにならない。以前は米軍だけで、彼等の出没する地域は限られており、殆どの米兵は平時なので手当てもなく、遊ぶ金にも不自由して、飲食街には歓迎されなかつた。

その点、若い自衛隊員たちは、衣、食、住の心配がなく、たとえ一ヶ月分の給与を一晩で使い果たしても、なんとかなるという感覚で、企業のサラリーマンと比べても、遊興費にかける割合が多く、浜松市内の飲食街では、上客として歓迎されていた。

街に巣くうチンピラたちにとつて、若い自衛隊員たちは、絶好のカモだった。彼等にとつて（トラブルが起きそうになつた場合はすぐ逃げろ）と、教育されている隊員たちは、格好な餌だった。

単純に腕力だけの闘いであれば、日頃訓練で鍛えている隊員たちの方が優勢であるが、いざとなると、文句なしに逃げ散る隊員は、チンピラどもにとつて、ストレス解消の手段であり、日頃、組の内部で抑圧されている、鬱積した気分の捌け口でもあつた。

それに脅すと、たまには素直に金を出す隊員もいて、チンピラたちは隊員の物色を競いあつてた。

隊の生活に慣れた下士官や、古参の隊員であれば、基地の外に拠点を設けて私物を預け、外出のときはスーツに着替えるので、あまり目立たないが、配属されたての新隊員たちはそんな知恵も余裕もないので、制服のまま夜の街に出かけてゆくのでよく狙われた。

航空自衛隊の基地内での生活は、内務班編成になつていて、一つの内務班が大体十五名ぐらいの人員で、空曹と空士と一緒に居住している。

陸上自衛隊のように、訓練と直結したような厳しさはなく、それぞれが自分の職域に従事して日課をこなし、空曹の内務班長のもとで、家庭的な雰囲気の中での生活だった。

ただし厳しくないといつても、それは人間関係についてであつて、規則で統一された生活は、朝六時の起床に始まって夜十時の消灯ラップまで、勝手気儘はゆるぎなかつた。

術科学校でも、教官として勤務する空曹や、要員としての空士たちが、多数の内務班を形成しているが、六月に入つて間もない日、内野一等空曹を内務班長とする整備課程の班に、新隊員が二名配属されてきた。

はじめて外出を許可された日、土曜日の午後六時に外出したまま、門限の十時になつても帰隊しなかつた。

最終バスに乗り遅れたのではないかと、内野一曹が正門の警衛所で待機したが、十二時をすぎても帰隊せず、電話連絡もなかつた。この基地に配属されてきたから、半月になるので、その間外出時に注意すべき事や、緊急時における連絡の方法などは、十分承知をしている筈なのに、二人とも連絡がないというのは異常だった。

警務隊に報告すると、問題が大きくなつてしまつたので、内野一曹は術科学校の当直司令である、松本二尉と打ち合わせのうえ、車両部からジープを借り出して、同じ内務班の平井空士長と二人で、浜松の市街地に向かつた。

もう深夜で、初夏というのに肌寒かつた。繁華街を一回りしてみたが、行き交う

人影もなく、途中基地と連絡をとったが、まだ帰っていないとのことだった。

翌日というよりも、この朝の七時にはじまる点呼で、彼等の不在が報告され、問題は内務班で握りつぶす訳にはいかなかった。

連絡が取れているの規則違反であれば、庇いようもあるが、行方不明では、万一生死にかかわる事件にでも発展した場合、自衛隊あげての社会問題になる恐れがある。

点呼後二人の不在が、内務班長から当直司令を経由して、術科学校本部と基地司令官まで報告があった。

学校本部から警務隊に要請が出され、警務隊による捜索が開始された。同時刻に外出していた隊員たちに対しての目撃証言等、素早く情報が集められ、その日うちにほぼ足取りの検討がついた。

## 二

彼等二人の目撃者は、基地隊に所属する隊員からであったが、その説明によれば昨夜七時ごろ、千歳町の飲み屋街で、呼び込み風の男に案内されて、路地に入っていくのを見かけたというのが、最後の目撃情報だった。

警務隊員と同行した、内野一曹と平井空士長が、二人を見かけたという場所に急行したが、まだ午後四時を過ぎたばかりなので、殆どの店は開店していなかった。

基地に一度引き返して、私服に着替えた内野と平井が六時になるのを待ち、千歳町の飲み屋街を、一軒づつ軒並みに訪問して、二人の隊員を見かけなかったか尋ねて歩いた。

そのうち、居酒屋の店先で焼き鳥を焼いていた店員が、向かい側のスナックに、昨夜八時近くになる頃、一人の男に案内されて入って行くのを見た、という証言が得られた。

その店は七時半頃開店することと、まだ看板に明りがついていなかった。二人は、その居酒屋で食事をしながら、向かい側に見えるスナック『海峡』の開店を待った。

七時半近くになったとき、ホステスらしい若い女性がきて、シャッターを開けはじめた、その作業が終わるのを待つて、内野が女性に声をかけた。

「失礼ですが、このお店の方ですね」

「ええそうですが、何か？」

「私、航空自衛隊の者ですが、昨夜私どもの隊員が、二人でお邪魔したと思うのですが、ご存知でしょうか」

「ああ、ゆうべの隊員さん、閉店までいたわよ」

「いまだここにいるのか、ご存知ありませんか？」

「さあ、私は先に帰ったので、後はどうなったか。ちよつと待つて、いまマネージャーに電話してみるから」

内野は二人の所在がわかりそうなので、ほっとしたような顔で平井を振り返った。平井も安心したのか、笑顔で頷いていた。店の奥から先程のホステスが、

「マネージャーが、電話に出てくれって言ってるわよ」

大きな声で内野に呼びかけた。

「わかりました、直ぐ代わります」

内野が受話器を受け取った。店の中は薄暗くてよく見えなかったが、受話器の置いてあるカウンターの周辺だけは、スタンドの明かりで浮き上がったようになっていた。

「代わりました、航空自衛隊の内野と申します。昨夜お世話になった、うちの隊員のことと、お伺いしたいことが……」

言い終わらないうち、いきなり、

「お聞きしたいって、二人ともここにいるよ。ゆうべ散々飲み食いた上、勘定が足りないって言うんでごたついて、うちの大事なお客さんと揉めて、怪我までさせちまったんだぜ。飲み代の不足分や怪我したお客さんの治療費を、実家から送って貰うというので待つてるところだ。解決するまで、二人は預からせて貰うよ」

一方的に早口で喋った、内野が、

「とりあえずこれから、そちらに伺わせていただきます」

苛立つ気持ちを抑えながら言ううと、相手は、

「こつちにきて貰っても困るよ、これから店に向うから、そこで待つていてくれ」  
一方的に電話を切った。内野は相手の巻き舌で威圧するような喋り方で、堅気ではないなと感じ、嫌な気分を襲われた。

ホステスが開店準備を始めたので、最初に寄った居酒屋に戻り、焼き鳥を食べながらマネージャーを待つことにした。店のマスターが心配そうに寄ってきて、

「何かあったんですか？ 私から聞いたと言われると困りますが、向いの店は小田組が関係する店なんで、気をつけた方がいいですよ」

耳元で囁いた。内野はやはりそうか、と自分の予感が的中したことで、ますます



気持ちが悪くなった。傍で聞いていた平井が、

「このことは、一応本部に連絡した方がよいのではないのでしょうか」 心配そうに言った。

「ちょっと待て、相手の言い分を聞いてからにしよう」

内野には立場上の責任とプライドがある。八時頃三人の男が『海峡』に入って行くのが見えたので、内野は居酒屋の勘定を済ませて、『海峡』に平井と入った。

店内には明かりが付き、人の顔が見分けられるくらいの明るさになっていた。ボックス席に三人の男が腰掛けていて、それぞれ煙草をふかしながら、内野たちを嫌な目付きでみつめていた。

「自衛隊の内野と申しますが、マネージャーはどの方でしょうか」

「マネージャーは俺だが」

三人のなかから、顔色の悪い痩せて上背のある男が立ち上がった。

男の目つきは、客商売のものではなかった。

「先程は電話で失礼しました、どういふことになっているのでしょうか」

頭を下げながら言うと、マネージャーは、

「どうもこうもねえよ、電話で説明したとおりだ。それともあんたが全部立て替えるとも言えるのか？」

決めつけるような言い方だった。

「どのような対応をさせて戴くにしろ、当事者の隊員に会わせて貰えないのでしょうか」

あくまでも下手で、内野が言うと、

「なにーっ、隊員に確認しなけりや俺の言うことは信用できないって言うのか！」

マネージャーが、居丈高に怒鳴った。

「いや、そういうわけじゃないんですが、一方的なお話では処理のしようがないじゃありませんか、隊には隊の規則があることですし」

「なにが一方的だ。当の隊員が二人とも自分たちの非を認めて、実家と連絡をとって弁償するって言うんだから、余計なお節介はやめろよ」

言い終わって、他の二人とわざとらしく天井を仰いで高笑いした。

「とにかく、部隊には規則があつて、昨夜も無断外泊になっていることだし、二人に対しては処罰があるかも知れないので、責任者の私としてはこのまま帰るわけにはいかないのです。お願いします、二人に会わせて下さい」

「二人とも、もう基地には帰りたくないって言うてるぜ、隊を辞めることになれば、

俺の方で面倒見るから心配するなよ」

このとき、黙って聞いていた平井が口をはさんだ。

「それじゃ、まるで監禁じゃないですか、二人の意思も確かめず、はいそうですかって、このまま基地に戻れませんか」

憤然とした口調で言うと、ボックスに座っている男が、

「この野郎、誰に向つて口をきいてるんだ！」

怒鳴り声をあげながら、傍にあつた陶器製の灰皿を、平井めがけて投げつけた。

平井は顔を振って避けようとしたが、唇の右側に当たり切れて出血をした。平井はズボンからハンカチを出して傷を抑えた。内野が、「そんな乱暴しなくても、話せばわかることじゃないですか、その金銭の補償というのはいったい幾らなんですか？」

務めて表情を変えないようにして訊いた。

「店の飲み代十万と、怪我人の慰謝料二十万、合わせて二百十万円だ」

うそぶくように言った。内野はこの相手では常識的な話し合いは無理だと考えた。

「わかりました。一旦基地に帰ってから出直します」

「ほか野郎、もう二度とくるな」

灰皿を投げた男がまた怒鳴った。

平井が、なにか言おうとして、前に踏み出そうとする気配を感じ、おしとどめた内野が、

「とにかく一旦戻つて出直します」

言い捨て、平井を促して表に出た。

### 三

内野一等空曹と平井空士長は、直ちに術科学校の本部に戻った。本部には直属上官である近藤三佐と、当直司令およびその他、基地隊の関係者が待機していた。

スナック『海峡』における話し合いの概略を報告すると、近藤三佐が、

「平井空士長は、すぐ遠州病院にいつて傷の手当てを受け、診断書を貰つてこい」直ちに指示を出した。

「大した傷ではないのですが」

平井が言うと、

「傷の大小じゃない、これからの処理で必要なことなんだ」

その意味を悟った平井は、急いで遠州病院に向った。

警務隊が駆けつけ、状況報告のあと今後の対策について、緊急会議が開かれた。席上では、これ以上自衛隊関係者が交渉に当たっても、また内野一曹と同じことになりそうだという意見が多かった。たとえ警務隊が交渉しても、外部の民間人に対しては、司法権を持つていなければならないし、まして相手はアウトロー、残念だがこは警察に頼るほかないだろう、との結論になった。

早速、浜松署に連絡して警務隊員と平井一曹が説明に赴き、浜松署は直ちに担当刑事が二人と同行して、スナック『海峡』で、マネージャーから事情聴取を行なった。十二時過ぎなので客はなく、マネージャーと女の子二人だけだった。

その最中に、この状況を見透したように、当事者である二人の隊員が、組員らしい男に連れられて店に入ってきた。二人とも顔色を無くしていて、内野が声をかけても顔をあげず、俯いたままであった。内野が、

「どうした元氣ないな、無事なんで安心したよ、昨夜の状況を説明してくれないか」

宥めるように言った。

マネージャーが、内野に言ったことと同じようなことを喋り始めた。浜松署の刑事が、

「あなたに訊いているんじゃない、その二人に質問しているんだ！」

大声でマネージャーの説明を遮った。

二人とも、口もろくにきけない様子だった。この場所が昨夜トラブルのあったところで、マネージャーや組員が同席しているのでは、尚更話し難そうだった。刑事が、

「これじゃあ状況が掴み難いので、署で説明して貰おう」

と言って、二人を連れて浜松署に移動することになった。

皆が表に出て、路地を出たところに停めてある、パトカーと自衛隊の車に乗り込むとき内野が振り向くと、店の表に出たマネージャーが、これみよがしに、皿に盛った塩を振りまいてるのが見えた。

浜松署における事情聴取の結果は、次のようなものだった。

昨夜二人が、久し振りの外出なので、一杯やろうかということになり、不慣れな千歳町の飲食街の辺りをうろうろしていると、一人の若い男が近づいてきた。

「隊員さん、お店を探しているのなら、安く飲めて可愛い女の子がいる店がありま

すよ、私もいまその店にゆくところで、一人三千円もあれば御の字ですよ」

その言葉につられ、スナック『海峡』に入ったらしい。

隊員の一人は、岩手県にある小さな町の出身で、入隊まで町の鉄工所で働いていた、朴訥さを絵にかいたような、二十歳を過ぎたばかりの青年だった。

この時代には珍しい若者で、盛り場で遊んだ経験は殆どなく、ネオンのきらめく歓楽街に、胸が震える思いを抑えかねていた。

もう一人は、群馬県の伊勢崎に近い村の出身で、航空自衛隊に自分の将来を賭けるつもりで入隊してきた、十九歳の若者だった。

店でビールを飲んでるうちに良い調子になり、テーブルにいた女の子たちが、もてなし上手なので、すっかり舞い上がってしまった。女の子たちに、

「一人三千円だとこれで終わりなの、私たちになにかご馳走して」 甘え声でにじり寄られて、今更断るわけにはいかなかった。二人ともこのところ、三ヶ月も外出しなかつたので、基地のPX以外で金を遣う場所もなく、三万円ぐらいつつ持っている、今夜はお大気分でした。

——ああいいとも、なんでも好きなもの飲んでくれ、三千円じゃ三倍飲んでも一万円で済む……、大盤振るまいがはじまった。その頃一人の若い客が、隣の席に坐り飲みはじめた。常連らしく女の子が一人そちらに移動した。

若者たちのこと、暗黙のうちに張り合う気分が高まり、次第にエスカレートして、十九歳の隊員がトイレに立った帰り、隣の席の傍を通り過ぎようとしたとき、その席の客がいきなり足を出したので、足を取られて転がった。

それを見ていたもう一人の隊員が、椅子から立ち上がり、足を出した客にパンチを見舞った。客が椅子ごと後ろにひっくり返り、わざとらしく呻き声をあげた。

店のマネージャーが、どこかに電話をすると、五分もしない内に、店のドアを蹴破るようにして、三人の男がなだれこんできた。

「そいつらか！ 俺の身内にちよっかい出した野郎は」

怒鳴りながら、呆気にとられてる隊員たちに近寄り、十九歳の隊員に平手打ちをくらわせた。三人とも明らかにヤクザだった。

すっかり酔いの覚めた二人が、呆然としてると、マネージャーが計算書を持つてカウンターから出てきた。

「店でごたごたは困りますよ。怪我したお客さんとの話し合いは別にして、とりあえず店の勘定を払って下さい」

二人が伝票を見ると、一の下に〇が五つ付いていた。見間違いないかと確認

し直したが、請求額は十万円だった。

「僕たちこんなに金を持っていません」

驚いて言う、マネージャーの態度が一変して、

「なんだと、金がないだと？ お前ら金も持たないで飲みにきたのか」

居丈高な声を張りあげた。

「案内してくれた人が、一人三千円で飲めるからというので、それなら十分間に合  
うと思つて入つたんです」

年上の隊員が言う、

「なに言つてんだ、女の子が三千円の分はこれで終わりつて言つたら、なんでもじ  
ゃんじゃん持つてこいつて言つたのは、お前たちだろう、ちよつと身分証明書を見  
せろ」

二人が渋々身分証明書をとりだすと、十九歳の隊員と見比べて、

「なんだ、お前は未成年じゃないか、自衛隊は未成年でも酒を飲んでいいのか、と  
りあえずこれは預かつて置く」

一方的に取り上げてしまった。二人の持ち金を全部出して見せろと言うので、テ  
ーブルの上に並べたところ、合計して六万円近くあつたのを取り上げて、

「隊の方に金を置いてあるんだろう、これから一緒に行くから不足分を払え」

凄味を利かせて言つた。二人は顔を寄せて相談していたが、あとの五万円くらい  
は、なんとか間にあいそうなので、

「わかりました、隊で払います。門限がなくなりますので帰して下さい」

頭を下げて頼んだが、金と引き換えじゃなければ、身分証明書は返せないと言つ  
た。

身分証明書がなければ、衛門を通過できないと言つと、それじゃ誰かに連絡して、  
金を持つて来させろということになった。

そのとき、黙つて事の成り行きを見ていた、三人のうちの一人が、

「ちよつと待て、それじゃあ怪我をした俺の身内に対する弁償は、どうなるんだ」  
タイミングを計つていたように切り出した。

「あつ、済みません、こちらの話ばかりで。それで幾らぐらいで示談にして戴ける  
んですか？」

マネージャーが、自分の事のように尋ねた。

「この様子じゃあ、当分仕事に出られそうもないし、こいつは月に百万ぐらい稼ぐ  
ブルドーザーの運転手なんで、二百万ぐらいがいいところだろう」

言われて二人は目をむいた。特に十九歳の隊員は、そんな理不尽な要求は承諾で  
きないと、顔が紅潮していた。

「なんだその目は、不服でもあるのか」

重ねて、その男が言つた。二人は返事のしようがなく黙つていた。

「いずれにしても、隊にも金がないんなら、ここから実家に電話して送金して貰  
え」

男が再び言つた。時間はとうに門限をすぎている。

二人いたホステスは帰つたのか姿が無く、喧嘩相手も姿を消していた。

「家に連絡しても、そんな金ありません」

十九歳の隊員が言つた。

「なくても電話しろ、あるだけ送つて貰えば、不足金はお前たちの給与からの分割  
支払いを考えてもいい」

そのとき、三人のうちの一人が表に出てゆき、五分ぐらいすると猫をぶら下げて  
店に戻つてきた。そして、いきなり懐から短刀を取り出し、隊員たちが見守る前  
でぶらさげて来た猫を、床に押さえつけて首を切り落とした。

ギャーツ、物凄い悲鳴をあげて息絶えた猫の胴体が、ピクピクと動き、床に吹き  
出した血の匂いが生臭くたちこめた。

二人は震えあがつた。そして店の電話に飛びつき、交替で実家に電話をした。実  
家では深夜突然の電話で驚いたらしい。——詳しい事は、後で説明するけど、至  
急百万円必要になった、必ず返すから出来るだけ頼む……と頼んでいたが、二人と  
も実家の経済状態ははかばかしくないようで、良い返事は貰えないようだったが、  
幾らでもいいから出来るだけ、と必死になつて頼みこんでいた。

年上の隊員が、基地に連絡をさせてくれと頼んだが、男たちはこちらの解決がつか  
ないうちは駄目だと言つて、電話もさせなかつた。とりあえず今夜は、マネー  
ジャーの家で待機しろと言われて、彼の車で移動し、まんじりともせず朝を迎えた二  
人は、女房らしい女性から出された朝食に、手をつけようとしなかつた。

その日のうちに、知らせておいたマネージャーの銀行口座に、電送で、二人合計  
百二十万円の金が振り込まれて来た。

恐らく二人の実家では、理由が飲み込めないまでも、期待している息子たちの重  
大事とうけとめ、日頃真面目な息子の頼み、よくよくの事だろうと、必死でかき集  
めたものに違いない。

マネージャーは、三時過ぎに戻つてきて、

「振り込みは、百二十万きり入ってなかったぞ、伊勢崎から七十万、岩手県の方から五十万だ。後の差額は今ここで借用書を書け」

言われるままに、出された便箋に二人連名で八十五万円の借用書を書き、マネージャーに渡した。

一応は、自衛隊で基礎訓練を受け、隊員としての覚悟も身につきはじめてたつもりだったが、アウトローの作戦にまんまと嵌まり、二人とも魂を抜かれたようになっていた。

内野一曹や関係者のことを考えると、自分たちがなにか重大な犯罪でも犯したような、切羽詰まった感覚に囚われて、希望を抱きながら過ごした、基地の生活には、もはや二度と戻れないだろうと、悲しい思いで一杯だった。

浜松署の事情聴取によって、スナック『海峽』の不当な請求行為が問題になった。既に支払った飲み代の六万円については、二人の隊員の要求で、高額なボトルをホステスに振る舞ったというので、仕方がないだろうとのことで、警察でも単に正当な売価を指導するのみで、干渉はできなかった。

客に対する暴力行為については、怪我をしたという男を警察で追及したが、本人は病院にいったこともなく、まして支払われた示談金が本人に渡っておらず、警察側は恐喝と横領容疑で、マネージャーと三人の男たちを締め上げた。

それと同時に基地側から、あの夜灰皿を投げ付けられて怪我をした、平井空士長についての告訴状が提出されたので、マネージャーたちもギブアップし、告訴状を取り下げると条件に、百二十万円は返還されることになった。勿論八十五万円の借用書についても、警察がマネージャーから取り上げて、二人の隊員に渡した。

十九歳の隊員の飲酒については、本来ならば本人はもとより、アルコールを提供した店も、取締りの対象となるべきであったが、この件については社会問題にもなりかねず、基地側から警察に頼みこんで、表沙汰にしないように取り計らってもらい、今後の隊員教育の課題として、基地側で処理することになった。

無事に基地に戻った隊員たちの処分については、種々論議されたが、当夜の行為については、本人たちにも責任を負う部分があると、『戒告』の処分となった。この種の事件としては異例なほど軽い処分であった。

この当時、自衛隊では全国各地の市街地に近接する基地において、多かれ少なかれ類似した事件が発生して頭を悩ませていた。

この事件を契機に浜松基地では、基地外においての市民との接触、特にアウトロ

ーについての対策を定め、二度と同じ轍を踏むことのないよう隊員に再教育を施した。

## 第五章 縁は夢か

一

この頃の市民感情は、敗戦により大国日本であった筈の、高揚たる意識が薄れ、それまで敵国であった米国にすっかり凭れかかった、いわば魂を失った、さまよえる野良犬のような状態であった。

国防についての感覚が薄く、敗戦でうちひしがれた日本人が、折角手に入れた平和……、それも国際常識とのバランスを欠いた、閉鎖的な平和……を侵害されたような被害者意識で、自衛隊をまるで異邦の軍隊でも見るような目で見ていた。

浜松市は歴史の古い城下町である。徳川家康の頃、本拠地として街づくりされて以来の歴史があるが、反面、侠客や博徒などの伝統もあり、市民は彼等との触れ合いにさほどの拒否感がなかった。

そして今や侠客は存在せず、ヤクザのみが我が物顔で闊歩している。浜松では、自衛隊員がチンピラに拉致され、金を脅し取られた事件以来、隊員が繁華街を制服で歩く姿は殆ど見られなくなっていた。

警察も、はつきりした刑事犯に対しては、機敏な処置が施せるまで、組織力は拡充されてきたが、経済的なトラブルやチンピラたちの揉め事については、余程のことがないかぎり静観した。そしてあくまで、民事不介入の原則を貫いていた。

当時、市民権を失ったヤクザたちは、自分たちの食い扶持を稼ぐために、相当悪どいミカジメ料を稼ぐようになっていた。

基地側では、隊員たちについて愛国心の涵養や、有事に際しての志気に関わる問題として、隊内教育や基地外対策に腐心していたが、なかなかこれとは思ふ抜本的な解決策が見当たらなかった。

そうかといって、隊員を基地内にだけ縛りつけておくことは不可能で、外出の際はなるべく私服で、それも複数でという消極的な指導をしたが、いかに服装を変えてみても、やはり一般企業のサラリーマンとは、はつきり見分けがかった。

外出を控えるようになった隊員たちは、ストレス解消の場として、同好会活動に参加する者が多くなった。この時期、杉浦と森尾はともに二等空尉に昇進していた。

二人が指導する武道研究会は、基地内で『武研』と呼ばれはじめ、真剣に武道に

取り組む者や、単に健康管理のつもりで参加する者まで含めると、百名に近い人数になっていた。

杖術を修行している隊員の中で、何人かは短い期間の修行で、相当なレベルにまで到達しており、杉浦はいずれ近いうちに彼等を東京の本部に紹介して、正式な修行者として登録しようかと考えるまでになっていた。

この中でも、二十六歳になる富田二等空曹は、杖術も少林寺拳法についても天成の素質があり、杉浦も森尾も舌をまく程上達が早かった。

ただ、彼の短所は性格があまりにも直情径行で、杉浦は『技』よりも、この武道が基本理念とする、『心』の鍛練を強化させる必要があると考えていた。

富田敏行は、浅草で生まれたが、八歳のとき終戦間際の空襲で、両親と兄弟を亡くして、ただ一人生き残り、同じ浅草に住んでいた叔母に引き取られた。

地元の高校を卒業したが、二年間も就職先が見つからず、パチンコ店や飲食店の手伝いをしながら糊口を凌いでいたが、航空自衛隊の募集に応じて入隊し、防府南基地における新隊員教育を終えて、浜松基地に配属されたもので、自衛隊生活が性にあったのか、水を得た魚のような活躍で一選抜の昇進をして、入隊五年にして二等空曹の古参になっていた。

彼は、浅草の高校時代と約二年に亘る社会生活のなかで、腕力に自信があり正義感が強いため、しばしば地回りと喧嘩を繰り返して、そのけたはずれな強さで、地元のヤクザ組織からスカウトされた事もあったが、生来のヤクザ嫌いで、自衛隊の生活が一番身に合っていた。

娑婆では、毎日が衣、食、住の確保に追われ、将来に理想を描くことなど及びもつかず、それこそ追われる野良犬のような生き方をしてきたが、彼は幸運だった。

そのような生き方で精神が荒廃する前に、航空自衛隊のなかに自分の生きる道を見出だした。

入隊した若者たちの頭脳、肉体が、新しい技術の吸収や訓練に、全精力を注ぐことができるような、スケジュールが組まれているため、自衛隊に入隊してから努力を惜しまない若者の中には、娑婆にいるよりも数倍もの、人間的成長を遂げる者が多かった。

富田の場合も、国家への忠誠心や使命感などは、日頃の訓練や生活環境の中から生まれたものであったが、いまでは組織の中核を担う優秀な下士官だった。

富田は、最近起きた整備課程の、二人の新隊員の事件で、チンピラに灰皿をぶつ

けられた平井空士長とは仲がよく、彼が悔しい思いをさせられたのを知っているの  
で、——いつの日かチンピラどもに、目にも物を見せてやる、あいつらに對して、  
弱気になって腰を引いていたら、際限もなくなってしまう……と密かに考えていた。

このところ、酒好きな隊員も、市内の盛り場に出る事が少なくなり、基地の周辺  
にある数軒の居酒屋で、ひとときを過ごすことが多くなっていた。

今夜は、富田と平井、それに『武研』で一緒に修行している隊員が三名、基地の  
南側のゲートに近い焼き鳥屋で、酒を飲みながら何事か相談をしていた。

「どうだこの計画は、この現状を打開するには、これきり方法はないと思うが」

富田が一同を代表するような面持ちで言った。平井が、

「でも、あまりおっぴらではまずいですよ、変装でも考えないと」

思案顔で提言すると、富田は、

「勿論そうさ、自衛隊でございまして行動するわけにはいかないよ。隊員にちょ  
つかい出す連中を懲らしめれば、手を出す人間も少なくなるだろうというのが目的  
なんだから、変装も考えなくてはね」

富田たちは、チンピラも民間人だという、基地の見解に業を煮やして、この腕に  
覚えのある五人で『チンピラ狩り』と称する、自警団を組織しようとしていた。

あの事件以来、基地内でも様々な意見が出たが、——日本は法治国だ、市井に  
おける出来事は警察に任せておけばよい……、それが上層部の結論だった。

警察の機構は、事件が発生しないと動かない。被害者が出てしまつてから、結果  
を正しても仕方がない……、富田たちは、どうしても予防の手段が必要だと考えて  
いた。

当然基地では、そんな手段を許す筈がなかったが、若い隊員で満ちあふれている  
基地が閉塞感によつて、精神的な爆発を起こしそうになっていることも事実であり、  
早急に行動を起こす必要があつた。

## 二

三田空将が逝つて一年が過ぎた。杉浦は公用で愛知県の小牧基地に出張した帰り、  
夕方の八時に、東海道本線で浜松駅に着いた。列車での出張は久しぶりだった。

出張期間が、翌日の正午までとなつていたので、残された時間はたっぷりある。

私服での出張だったので、久しぶりに『しぐれ茶屋』に寄つてみようと考え、十分  
ぐらい歩いて店についた。

一階のカウンター席には、まだ誰もおらず杉浦が座ると、中から、——いらつ  
しゃいと声がかかり、板前が顔を出した。二階で宴会があるらしく、賑やかな声が  
聞こえていた。

カウンターの奥には、小鉢ものの料理が並べられてあり、調理場も忙しそうだつ  
た。板前がお茶を運んできて、

「済みません、いま上から降りてきますから」

忙しいのに、気を遣っているらしいので、

「いいですよ、気を遣わないで下さい、ゆつくり待ちますから」

お茶を飲みながら、いつもながら忙しい店なんだと感心していた。そのとき二  
階から賑やかな声とともに、陽子が降りてきて、杉浦を認めると、

「あらっ、杉浦さん、いらしたのですか、ご免なさいバタバタしていて」

早速横に坐り、嬉しそうに杉浦に手を重ねた。陽子の掌は冷んやりしていて気持  
ちよかつた。水商売を手伝っているにしては、相変わらず綺麗な白い手だった。

「どうして今まで、来て下さらなかつたの」

恨みがましい眼で、杉浦を責めた。

「申し訳ない、いろんなことがあつて、手を抜けなかつたもので」

「基地のお仕事は、大変なのでしょうね。それに杉浦さんと森尾さんは、武道の先  
生もなさっているんですつてね、他の隊員さんと違つて忙しいわけよね」

「そればかりでもないんだけど、とにかくご無沙汰で申し訳ない」

陽子は杉浦の前が、まだお茶だけなのに気づいた。

「あらあら、板さんも気がきかないわね、ビールくらい出したらいいのに」

「忙しいのに、済まないね」

杉浦が言つてるところへ、二階から、

「陽ちゃん、お銚子はどうしたのよ、もう鉄砲玉なんだから……」言いながら女将  
が降りてきた。

「あら杉浦さん、いらしたのですか、御免なさい、ちょうど宴会が入つたもので  
すから」

陽子が、ビールとおつまみを盆に乗せて、杉浦の前に運んできた。「ママお二階  
パス、悪いけれどお願いね」

「もう、しようがないわね、でも杉浦さんじゃ仕方ないわね、戦闘隊員一名逃亡か」

女将はそう言つて笑つた。忙しいのに困るけれど、杉浦が来たのは嬉しそうだつ  
た。

杉浦は悪いところに来てしまったと、いたたまれない思いがした。陽子が、ビールを杉浦と自分のグラスに注ぎ、杉浦の目をみながら、「再会に乾杯」

嬉しそうにグラスを当てた。

杉浦は、乾杯のビールを一気に飲み干した。乾いた喉によく冷えた液体が、身震いする程旨かった。

「おなか空いているんでしょう？」

「うん、食事していませんだから」

「この店忙しいから、表に出ましようか」

陽子が言った。

「おいおい、お店の忙しい最中にうまくないよ、女将に叱られるよ」

杉浦が慌てて言うと、

「大丈夫、かえって杉浦さんに気を遣わなくて済むので、ほっとするわよ。お手伝いさんが二人いるので心配ないわ」

もう杉浦のことしか、頭になかった。

「お手伝いさんで、育代さんたち？」

「いいえ、彼女は、今夜はシャンゼリゼなの」

陽子が続けて、

「でも、森尾さんて何を考えているのかしらね、育代があんなに待ち焦がれているのに、冷たい人ね」

自分の想いを託すような口振りで、杉浦の顔を見つめた。

「森尾も、自分と同じで忙しいんですよ。でもいつも会うと育代さんの話ばかりです」

「あら、私の話はないの？」

「いや、そんな事ないですよ、同じくらいあります」

杉浦が自分の事なので、顔を赭らめて答えた。陽子はその様子を見てちよつぱり気をよくした。

「今夜はお時間ありますか？ それによつてこの後のこと、決めたいと思うの」

「ええ明日の昼まで出張になつてるので、時間はあります」

「わかったわ、ちよつと待っていてね」

陽子は二階に上がり、女将と打ち合わせをして、外出の許しをとつたらしく、降りてくると杉浦に、

「もう少しの間、おビールでも飲んでいてくださいね」  
甘えるようなしぐさで、奥に入つていったが、しばらくすると着替えて出てきた。

黒を基調にしたワンピースで、髪は無造作にアップで纏めていたが、首から下げた真珠のネックレスが、清楚にきらめき、陽子の色白な瓜ざね顔とつぶらな瞳に似合っていた。

「なんだか、ここ数カ月のうちにすっかり大人びて、妖艶な感じさえ漂わせているように、杉浦には思えた。」

「お待たせしました、じゃあ出ましようか」

杉浦が、お会計は？ と訊くと、

「いいわよ、この次と一緒にしますから、その代わり近いうちに来て下さらないと、飲み逃げになるわよ」

冗談半分に、きつい言い方をした。杉浦が、

「女将に挨拶してからでない……」

立ち上がりながら言うと、

「私から言っておくからいいわよ、急ぎましょう」

せき立てるので、調理場に向かつて、

「ご馳走さま、また近いうちにお伺いします」

声だけかけて表に出た。陽子が近いところだけと言いながら、ちよつど通りかかったタクシーを止め、駅を大きく迂回して、ワールド・ホテルに車を着けた。

そして陽子が先にたち、最上階にある展望レストランにエレベーターで登つたが、平日なのに若いカップルで混み合っていた。

陽子が責任者らしい人と、何か話していたが、奥の窓側の席を周囲の客たちに詰めて貰い確保した。

席に着くと杉浦は、陽子に勧められて、この名物らしい『鴨ロースのソテー』を注文した。出された料理には、赤ワインがつけられてあつたが、このワインは陽子の好みらしい。

空腹の上に『しぐれ茶屋』のビールと、このワインとのチャンポンで、急に酔いが進んだようだった。

「余程おなかを空かせていたのね、お顔真っ赤よ、どんどん召しあがつて」

陽子が自分も赤い顔で言つた。陽子は、突然二人だけで食事をするこゝろになつたので、舞い上がり気味でいる。

「でも育代かわいそうよ、あんなに森尾さんを慕っているのに、よそよそしい所があるみたい。育代のどこが気に入らないのかしら、それとも貴方たち、浜松の女性はお嫌い？」

杉浦は、会話の内容が突然自分に振り向けられたので、思わずワインにむせた。自分だつて陽子を好きだ、夜寝ているとき夢を見る事もある、とても目の前の陽子に説明出来るような内容ではない……、窓越しに見る遠州灘の夜景が、二人で見ると、一際感傷的な思いで胸に迫ってきた。

遠くに点滅する漁り火、夜空できらめく無数の星々、いつか三田空将との悲しい対面するとき、涙でかすむ眼で眺めた、同じ遠州灘とは思えなかつた。

「なにを考えていらつしやるの、これからもう一軒つき合つて下さる？」

陽子が誘つた。

「結構ですよ、けれどその前にこのホテルに、今夜の宿泊を予約しておかなければ」

帰りが遅くなりそうだと、覚悟して言うと、それは私に任せておいて」

と陽子が引き受けた。杉浦がレジに立つと、

「お先に一階のロビーにいらつてます」

言いながら陽子はレストランを出て行つた。

精算を済ませて、杉浦が一階に降りると、正面玄関の表に停車しているタクシーの傍に陽子が立っていて、手招きしている。

タクシーが走り出して暫くすると、浜松の市街地を抜けて、田舎道を走り出した。

「どこに行くのですか？」

聞いたが陽子は、

「心配しないで私に任せて」

笑顔でそつと、杉浦の膝に手を置いた。

杉浦は陽子との先程の会話で、——よそよそしい……、と言われたのが頭に残っていたので、膝においた陽子の手をそつと両手で包んだ。あつち、と陽子が杉浦の横顔を嬉しそうに見た。

タクシーは三十分ほど走り、着いたところは館山寺温泉街だつた。この温泉は昭和三十三年の開湯でまだ歴史は新しく、標高四十米ほどの館山の麓で、東と西が浜名湖に面した風光明媚な場所なので、最近急激に発展しはじめた温泉街である。

まもなく車は、この辺りでも比較的大きなホテルの前に着いた。陽子が、

「さあ、着いたわよ」

明るい声で車を降りた。杉浦が料金を払おうとすると、運転手が、「先に戴きました」

頭を下げて言つた。

ホテルの正面玄関を入ると、従業員がにこやかに出迎えた。陽子が耳打ちすると、

「かしこまりました」

笑顔で頷ぎ、エレベーターでBFに降りた。廊下の向かい側にあるドアを開けると、いきなりポリウム一杯の音楽が耳に飛び込んで来た。そこはディスコだつた。

中に入ると、約八十坪程のホールで、若い男女が賑やかな音楽に合わせて踊つていた。

「ディスコははじめて？」

陽子が聞いたが、杉浦はディスコという言葉も、見る事さえはじめてであつた。

もつともこの頃、まだディスコは一般には普及しておらず、浜松基地に駐屯していた米兵が、出入りする店で踊つているのを、このホテルではいち早く取り入れ、試みに専門のホールをつくつたもので、結構若者の間で評判を呼んでいるらしかつた。陽子が、

「ディスコ・ダンスなんて、見よう見まねで躰を動かしていればいいのよ」

言いながら、ホールの中程にあるボックス席に座つた。

杉浦が珍しそうにホールの中を見回すと、正面の奥にステージがあり、その上で女の子が二人、髪を振り乱して踊つていた。

「あの二人は、インストラクターですか？」

陽子に訊くと

「いいえ、あのステージは誰が踊つてもいいのよ、きつと目立ちたいからでしょ」

ステージに眼を向けて笑つた。

ボックス席の反対側に、シヨット・バーらしいコーナーがあるのが杉浦の目には

いつた。

「陽子さん、僕はあちらの方がいいな」

三



杉浦の言葉で、二人は移動した。

カウンターに座ると、陽子がバーテンに、「バーテンさん、サムライ・ロック二つ作って下さい」と注文した。杉浦がなんだろうと考えていると、大ぶりのカクテルグラスに、青色をした飲み物が出て来た。陽子が、

「はい、杉浦さんのカクテルで乾杯しましょう」

グラスを上げたので、杉浦は中身の確認もできないまま、グラスを合わせて乾杯した。お酒のような味もしたが、柑橘類の香りが鼻を打ち、さわやかな飲み心地だった。

「これ、何がはいっているの？」

カウンターのなかからバーテンが笑みを浮かべて、

「お口に合いますか？ 日本酒にライムを割っただけのものですよ」 グラスを乾拭きしながら答えた。

「このカクテル、ライムの香りが日本酒の麴の匂いを消すので、飲みやすいのよ。それに名前がいいじゃない？ いっそ杉浦ロックとでも呼ぼうかな」

陽子が、からかうような口調で言った。

杉浦はサムライの呼び名は嫌いじゃないが、陽子さんは僕の事を、そんなに堅苦しい男と思っているのだらうかと、改めて顔を眺めた。杉浦はおかわりで、カティサークの水割りを注文した。洋酒の種類はあまり知らなかったが、カティサークは好きだった。飲んでいるうちに陽子が、

「私が教えてあげるから、踊りましょう」

立ち上がって誘ったが、目の前に展開される派手な動きには自信がなく、

「もうちょっと飲みたいので勘弁、陽子さん踊ってきてください」杉浦は陽子に不様な格好を、見せたくなかった。

「じゃあ、少し躰を動かしてくるから、ゆっくり飲んでいてね」

言いながらホールに出ていった。杉浦が飲みながら見ていると、陽子の踊りは、よくわからない自分の目から見ても一際しなやかで、たちまち周囲の若者たちの注目を浴びたのがわかった。

一曲終わると、上気してうつすらと汗を滲ませた陽子が、ハンカチで顔の汗を抑えながら戻ってきた。顔色がピンクに染まり、気持ち良さそうだった。

「杉浦さんも躰を動かせばいいのに、爽快よ」

陽子もカティサークを飲んだ。杉浦はいままで経験したことのない雰囲気と、久

し振りに見た陽子の、快活な美しさに酔っていた。

そのうちにスローテンポなメロディが流れはじめ、それまで活発な踊りを見せていたカップルたちが、抱きあつてチークダンスに移った。陽子が、

「これなら大丈夫よ、私のリードに任せておけばいいの、さ、来て」先にホールに出て誘った。昔、学生時代に杉浦は、先輩に連れられて行ったスナックで、チークダンスは教えて貰ったことがある。陽子とこんな形で向かい合うのは、はじめてであった。暫くはギコチなかつたが、そのうち陽子の動きに慣れてきた。あまり動き回るのはせず、全身でリズムを感じながらしつかり抱き合つた。

陽子が杉浦の背中に回した手を、きつく引き寄せようとするのがわかった。

「杉浦さん、お上手……」

かすれ声で陽子が、杉浦の胸に頬を寄せた。固く抱き合つた陽子の心臓の鼓動が、直に伝わってくる。陽子の若鹿のように戦慄く胸、杉浦は生まれてはじめての乙女の感触に、夢見心地だった。

いつしかメロディの中でゆらめき、足を運ぶことも忘れたように、お互いの軀を密着させ、合わせた手を強く握りあつて、二人だけの世界に浸っていた。

終わってから杉浦はカウンターに戻り、思わず水割りをガブ飲みした。

陽子も、黙々と水割りを口に運んでいたが、やはり相当酔っている様子だった。

『別れの曲』のメロディが、ホールを流れはじめ、——本日の営業は、これで終わらせていただきます……のアナウンスで、陽子が、

「いしましょ」

と、杉浦を引つ張るようにしてホールを後にし、向かい側のエレベーターに乗った。

エレベーターが一階に止まったので、杉浦が降りようとすると、陽子が腕を押さえて止め、五階のボタンを押した。いつの間にか陽子はセミスイートルームを予約していた。

#### 四

館山寺のホテルで、セミスイートルームに陽子と入った杉浦は、酔いのため思考力が鈍った頭で、——陽子を帰さなければ、と臆気に考えたが、気持ちのどこかでは帰したくない思いもあった。日頃の強すぎるくらいな自制心は、どこかに消えてしまっている。

ドアを閉めると、陽子が杉浦にとびつくようにして、首に手を回してきた。わななく唇が合わされ、次第に深くちづけになり、陽子はずるずると崩れかけた。

杉浦もこの瞬間、自分を取り巻く全てのしがらみが消えた。本能の赴くまま陽子をベッドに運び、そのまま覆い被さって口づけをつづけた。

陽子が呻くような小声で、

「洋服脱がせて……」と囁いた。それでもどかしい手つきで、ワンピースを投げ捨てるように、隣のベッドに置いた。

杉浦も夢うつつのうちに、スーツを脱ぎ捨て、陽子とベッドにもつれこんだ。

朝目覚めると、陽子がいなかった。隣のベッドが使われた様子がないので、二人は朝まで一つのベッドで過ごしたらしい。時間は八時を過ぎていた。

杉浦が、ぼんやり昨夜の出来事を思い返していると、陽子が部屋に入ってきた。

「お早う、お目覚め？ 八階の展望風呂気持ちいいわよ、入っていらつしやい」

明るい声で杉浦の唇に、チュッと口付けをした。

杉浦はホテルの浴衣を羽織り、洗面道具を下げて展望風呂に向った。入浴客もこの時間になると、四、五人きりいなかった。

広い浴槽に浸り、窓から外の景色を見ると、この館山寺は、浜名湖の北東岸に突き出た半島の、突端に位置するため、右も左も見渡す限りの湖で、晩秋の浜名湖はいよいよ小雨模様だった。

時折強く吹く風で、白く騒ぎ立つ水面が霞んで見え、この光景はいつまでも頭に残るだろうなと思った。部屋に戻ると、ベッドがすっかり整頓されていて、その上に杉浦の下着とスーツが揃えてある。「クリーニングなんかは、どうしているの？」

陽子が聞くので、

「基地のPXに、洗濯屋があるので頼んでいるよ、下着は自分で洗っている」

杉浦は、武道家の身嗜みとしても、下着類は常に清潔なものを、身につけるように心がけていた。

「これから下着類は、私が洗うから持ってきてください」

陽子が言ってくれたが、杉浦は、「宜しくお願います」と一応は言ったものの、彼女に自分の下着など、洗わせるつもりはなかった。

午後一時までに帰隊しなければならないので、十二時にはBOQで、制服に着替える必要があった。

今回の出張の目的は、小牧基地周辺の住民たちとの、航空機の騒音問題について

の懇談会で、今後における基地問題の参考にするため、参加を命じられたもので、私服での出張だった。

十時ぎりぎりのチェックアウトで、部屋をでるとき、陽子が頬を寄せてキスを求め、

「これからも、ずっと愛していてくださる？」

甘えるような口振りで言った。

「今日が二人の新しい出発だと思って、大切にするよ」

杉浦は言いながら固く抱きしめた。

ホテルのレストランで朝食を済ませてから、タクシーを呼んだ。帰る道すがら、昨夜は暗くて気がつかなかったが、沿道は銀色のススキが、二人を歓送するかのようになびいていて、晩秋の気配が満ちみちていた。

陽子が先に送るからというので、基地に向い正門前で降りた。

タクシーの後ろ窓から、振り向いて手を振っている陽子の顔が、ほの白く浮かび、ひたむきな目に、息詰まるほどの愛しさが胸をつき上げてきた。

浜松市の盛り場で、最近妙な出来事が続いていた。小田組のチンピラたちが、自衛隊員に因縁をつける度に、何者かに襲われ、足腰の立たない程ぶちめされる。

最初のうちは、天成会の仕業ではないかと疑ったが、天成会でも同じようなことが起きており、双方の組ともチンピラの独り歩きが減り、複数での行動が多くなっていた。

いつも襲ってくる相手は、中年男らしかった。あるとき、小田組の二人連れが、夜の十一時ごろ、千歳町の路地裏で立ち小便をしていると、通りがかりの、ステッキをつけてハッチ・キャップをかぶった老人に、

「お前さんたち、そんな所で立ち小便はいけないよ、張り紙が見えないのかい」

大声で注意されたので、

「なんだあ爺い、余計ななご託ぬかすな！」

怒鳴り返し、猫でも追い払うような手つきをした。

「お前たちのような連中がいるから、浜松もなかなか良くない」

物怖じしない言葉に、血が昇った男が、

「くそ爺い、ふざけんな……」

軽く殴るつもりで、手をあげた途端、ステッキで足を払われ、ものの見事に尻餅をついた。完全に切れた二人が、——野郎、ぶち殺すぞ……、喚きながら襲いかかったところ、あつという間に殴り倒され、一人は右足をもう一人は右の利き腕を、骨折寸前まで強打され、その上当て身を食らって昏倒してしまった。

騒ぎで、他の組員たちが駆けつけたが、すでに相手の老人は姿を消していて、気がついた二人の組員も、狐につままれたような面持ちだった。

またある時は、陸上自衛隊から術科学校に派遣されたばかりの隊員が、三人連れで砂山町のスナックで飲んでるとき、店に入ってきた小田組の組員二人と、口論になった。

基地での注意事項も忘れて、ムキになってるところへ、報らせで駆けつけた三人を加えた五人が、店の表に出た隊員に襲いかかり、隊員たちも果敢に抵抗した。

手強いと見た組員の何人かが、短刀やっばを出して切りかかったため、さすがの隊員たちもひとかたまりになつて竦んでしまった。

そのとき、ステッキをついた老人風の男が二人通りかかり、無言のうちに、組員たちの手からステッキで短刀を叩き落とし、目にも止まらぬ早業で、五人の組員に当て身をくらわせ、全員が昏倒したのを見届けた後、二人揃って立ち去つていった。

怖々、店の中から覗いていた、マスターやホステスたちが見たのは、ステッキをついた老人と中年らしい男で、二人とも髭を生やしているので、人相ははつきりしなかつたらしい。

この夜の当事者だった隊員たちも、こんな事件があつたことは、問題が大きくなるのを恐れて口外はしなかつたが、いつとはなく基地のなかで、この『天狗』のような連中は、もしかしたら隊員ではないかとの、噂が広まりつつあつた。

小田組では対立する天成会が、西の本部から、腕の立つ人間を送り込んできたのではないかと疑ったが、それにしても、ステッキや杖を必要とする年配の男ということが解せないし、それに老人の鉄砲玉など聞いたことがなかつた。

痛い目にあつた組員の話によれば、その男は一人だけではないらしく、このままでは組の面子が丸潰れになると、小田組をあげての態勢をつくり、四、五名ずつの組が直ちに出勤できる手筈を整えていた。

天成会の方では、この事件が主として小田組のシマ内で起きているので、とぼつちりを受けているのではないかと考え、ことさら天成会の代紋を示すバッジを、目立つように着けて歩いた。

天成会では、自衛隊員に対しては手を出さないよう、西からの指示があり、このところトラブルは絶えている。

小田組は、天成会に対抗するための資金づくりとして、シャブ、売春、恐喝など手あたり次第、シノギになることには、なんでも手を出していたが、資金源のうち大きな割合を占める、歓楽街からの『みかじめ料』の収入が、末端組員たちの活動が鈍つたため激減し、組の存続に関わる問題だと、幹部連中が飛び回るようになっていた。

浜松の極道たちが、名を聞いただけでもビビる、通称『人斬り讓次』と呼ばれる男がいる。本名を花村讓次といい、瘦せた筋肉質の髯と、頬の削げ落ちた顔色の悪い男で、組の要のような存在だった。組長と兄弟分で、組の相談役であつたが、天成会側もこの男が睨みを利かせているため迂闊に手も出せず、現在のような状態で睨み合いが続いている。

讓次はこのところ、末端組員が次々に痛めつけられていて、それも決まって、自衛隊員絡みで起きているので、これは天成会よりも、むしろ自衛隊の人間の作業ではないかと疑っていた。

いずれにせよこのままでは、天成会との力のバランスにも影響しかねないと思い、どうにかして捕まえ、腕の一本もたたつ斬ろうと、機会を狙っていた。

ある晩秋の夜、元浜町の居酒屋で、制服の航空自衛隊員が、五人で飲んでいるとの情報で、小田組に寄せられた。

讓次は、自衛隊に対して別に悪感情を抱いているわけではなく、いままで組員が『自衛隊狩り』に精を出しているときでも、——いい加減にしておけ……とセーブしていたくらいだったが、今夜は良い機会だと考えた。

その五人を餌にして騒ぎを起せば、もし『天狗』どもが自衛隊の関係者であれば、必ず出てくるだろうと考えて、十人の組員に指示を与え三々五々、居酒屋に客として潜りこませた。

はじめのうちは、マスターも従業員も、ときならぬ客の来店に気を良くしていたが、暫くするとこの客たちが、最初にビールを注文したきり次ぎの注文をせず、どの顔も、嫌な目つきの、うさんくさい連中であることに気がついた。店内にはこの男たちと自衛隊員の他に客はなかった。

そのうち、目つきの悪い客の一人が、グラスを持って立ち上がり、近くのテーブルに移動する振りをして、わざと自衛隊員の席でよろけ、隊員の一人に頭からビールをかぶせた。

一瞬、何事かと驚いた隊員が立ち上がり、

「なにをするんだ！」

カッとした様子で怒鳴った。

「てめえがぶつかったんじゃないか、ばか野郎！ いちゃもんつける気かこのガキ！」

ドスの利いた声で、隊員の胸をいきなり突き飛ばした。隊員はテーブルに倒れ、上にあつた料理が散乱した。

成り行きを見ていた他の隊員たちも、一斉に立ち上がり、口々に

——乱暴はよせ……と顔色を変えた。

そのとき、客席の男たちが一斉に立ち上がり、——なんだ自衛隊員が民間人にイチャモンつけるのか……と言って、何人かがビール瓶を下げて、隊員に詰め寄っ

た。

見ていたマスターが、警察に通報しようとして、電話器に近寄ると男が二人先回りして、電話をさせなかった。店員が表に出ようとしても、出して貰えなかった。

五人の隊員は、空士長が一人で二等空士が四人だったが、空士長が隊員たちに、「なにがあつても手を出すな」

緊張した顔で戒め、先頭を切っている男に、

「なにか誤解があつたようですが、自分たちは帰ります。マスター勘定をお願いします」

入り口に向つて歩きながら言った。

「おい、ふざけんなよ、このまま帰れると思うのか？」

男が威嚇するような声をあげた。

「自分たちは、トラブルを起こすつもりはありません、謝らなければならないので、この場はこれで赦して下さい」

胸の中では、許しを乞う理由などないと思いつつも、四人の隊員のことを考えて頭を下げた。

「ともかく店の中じゃあ、迷惑かけるんで表に出ようや」

相手が言うので承知した。会計をすませ表に出ようとしたとき、マスターが心配そうに、

「大丈夫ですか？」

そつと聞いてきた。

「大丈夫、自分たちは、なにもしていないんですから」

言いながら空士長は隊員に、

「離れるんじゃないぞ、ひとかたまりになつていろ」

注意して表に出た。この時刻の三十分前頃から、各盛り場でチンピラどもが、——いま元浜町の居酒屋『にしき』で、自衛隊員がやられている……と触れ回つた。

讓次の指令によるもので、『天狗』を誘い出そうとの計画だった。讓次は前もつて組員たちには、もし『天狗』が現れない場合は、適当なところで解放してやれ、警察が介入するような事になると、面倒だからと言ってあつた。

一度に十五人の客を送り出したマスターは、表の様子を窺いながら、乱闘でもはじまったら直ちに一一〇番しようと、窓ガラス越しに覗いていた。

店の前の通りを挟んだ向かい側に、三十坪ぐらいの空き地があり、薄暗い街灯の下で、ひとかたまりになった隊員の周りを、組員どもが取り巻いている。

そのとき、近くの道端にブルーバードが停車して、運転席から鳥うち帽をかぶった中年に見える男が、その成り行きを眺めていた。脅しても、小突いても、ただひたすら頭を下げている隊員たちに、業を煮やした組員の一人が、いきなりビール瓶を近くにある石垣に叩き突け、先がギザギザになった凶器を、空士長に突きつけたとき、ブルーバードの後部ドアが開き、杖をついた老人が降り立った。

老人とは思えない素早さで、集団に近づき、ビール瓶をふりあげた手に杖が一閃した。

周囲の人間には、何が起こったのか分からない程の、身のこなしであった。右手を抱えて呻き声をあげる組員に気づき、他の者は顔色を変えて後ずさりした。

隊員たちも咄嗟のことなので、茫然としていた。

突然な出来事に驚いた組員たちが、我にかえり、口々に喚声をあげて老人を取り囲んだとき、二人連れの男が空き地に入ってきた。「そこまでだ、ストップ」

男の一人が、ドスの利いた声をかけた。男は日本刀を左手にぶら下げている。組員たちが一瞬静まり返り、主だった者が、

——ご苦労さんです……と頭を下げた。

「やっとな出会えたな、自衛隊の天狗さんよ、俺は小田組の花村という者だが、差しで勝負しようじゃねえか。お前たちは後ろに下がっている」

組員たちを下がらせて、空き地の中央に立った。そのとき、ブルーバードの運転席にいた男が老人に近寄り、

「ここは私が引き受けるから、隊員を帰せ」

囁きながら、やはり杖をついて中央に進み、讓次の真向かいに対峙した。

讓次の方が十センチ以上も、上背が勝つて見える。讓次は手にした日本刀を抜き放った。これまでに何人もの生き血を吸った、無銘の業物である。

鳥うち帽の男は、ジャンパー姿で顎鬚を伸ばしている。年齢の判別がしかねる風貌だったが、髭全体から傍目でも感じられるほど、精気を発散させている。

手にしている杖の石突きを、大地に突き立てるようにして中腰で構え、地下足袋の足が摺り足になった。

杖の石突きの部分には、先の尖った鋼鉄の冠がむきだしになっていて、その部分だけが街灯のあかりを反射して、鈍く光っている。讓次はその構えを見て、相手が只者でないことを悟つたらしい。最初のうちは脅して、指の一本も詰めさせようか

ぐらいの気持ちでいたのが、俄かに真剣な表情に変わり、髭中からメラメラと殺気が立ちのぼった。

他の組員たちも今は声もなく、讓次と同行してきた男が懐に手を入れたまま、凍りついた表情で、二人の姿を見つめている。

老人に帰隊しろと言われた隊員たちも、魅入られたような表情で、空き地の中央で対決している二人を凝視していた。

居酒屋のマスターは、警察に報らせることも忘れて、乾いた唇を嘗めながら怖い物見たさで、店の窓ガラスに張りついている。

二人とも動けなかった。双方の吐く息だけが、二月の寒気の中で白く流れた。

讓次は鹿兒島で生まれ、幼い頃から地元で示現流を学んだ。将来はこの道で、身を立ようと考えたこともあったが、二十代の後半で、ある出来事のため小田組の組長と、兄弟分の盃を交わした。四十歳の今日まで、ヤクザの飯を食ってきたが、今まで身を晒しての斬ったのはたの相手の、すべて極道だった。中には多少武道を齧った者もいたが、大方は自己流の喧嘩殺法で、正式に剣を修行したことのある讓次の敵ではなかった。

しかし今夜の相手は違った。恐らく杖術の手練だろうと察していた。それもなまじな使い手じゃない、こんな自堕落な世の中に、これほどの男がいることが信じられなかった。

迂闊に動くやられる、仕掛けた途端につけ入られるのが分かった。相手が手にしている杖は、持ち主によつては恐ろしい凶器になる。

大上段の構えを、徐々に中段の突きの構えに移した。中段に移行する間も全身の神経を集中した。いつ動きに乗じられるかと息が抜けなかった。

こうなれば、相打ちを覚悟で突きあるのみ、斬るには難しい相手だった。この集団の中で、臆気ながら二人の緊迫した状態を、察することが出来るのは、老人ともう一人、讓次と来た男だけであった。

この男も、これまで讓次の決闘には、数回立ち会ってきたが、今夜のように膠着状態になったのははじめて見た。

相手の実力が凄まじいものだとわかった。讓次が動くに動けない状態になっていた。——こんな事なら、短刀やっばより拳銃ちんかくを持ってくるべきだった……。男は悔やんでいた。拳銃の所持は、警察が煩くなってきたので、万一手持のままバクられでもすると、組の存亡にも関わる事なので、天成会との抗争でもないかぎり、持ち歩かないように申し合わせている。

僅か二十分ぐらいの時間が、周囲の人間には気の遠くなるように感じられた。こうなれば、体力と精神力の勝負だった。精神力は、日常の鍛練と生きざまの反映でもある。

そのとき、航空自衛隊の夜間訓練機の轟音が、二人を襲った。讓次が捨て身の勝負に出て、必殺の突きを放った。辺りの大気がキーンと音を立てて震えた。

瞬間、身を沈めた男の杖が、目にも止まらぬ勢いで、讓次の真剣を撥ねあげた。白刃は讓次の手を離れて落ちた。男の顎先をかすめたのか、微かに血が滲んだが、男の杖が讓次の喉元で、ピタリと止まっていた。

そのまま突けば讓次は、血反吐と共に悶絶したであろう。

「参った、好きなようにしてくれ……」

讓次が両腕をだらりと下げ、息を弾ませて言った。

「いや俺の方こそ、手加減してくれて命びろいした。相打ちだな」

男が組員たちに聞こえるように言った。

アウトローたちにも、究極の男の勝負がわかったのだろう、周囲の張り裂けそうな空気が、ホツとした雰囲気変わった。

隊員たちも、現実目の前で起きた凄まじい出来事に、暫くの間息をつくのもままならない様子であった。

「今後小田組は、自衛隊員に対しては、一切手出しをしない事にする。できれば『天狗』さん、正体を明かして貰えないかな」

「申し訳ない、今ここではそうもいかないんだ。いつか機会があったら必ず連絡する。俺の方も小田組に対抗するのは止める」

讓次は慄然としていた。自分が敗れたことには、勝負は時の運、覚悟の上である。

それよりも、こいつらは『自衛隊員』だ。それも一人や二人ではないらしい。こんな凄腕がどのくらいいるんだろう……

その不気味な存在感で、これまで天成会と張り合って、一步も退かなかった自信が揺らぐ思いだった。

基地には、化け物が棲む……。こいつ等を敵に回したら組が潰される。底知れぬ恐ろしさを感じていた。

この後二人は、握手して別れた。生き方も立場も違う二人だが、命を賭けて意地を張り合った男同志、わかり合うのも早かった。二手に別れてそれぞれ帰路につい

た。居酒屋のマスターも、何がどうなったのか良くわからないけれど、二組が無事に別方向に帰って行ったので、胸を撫でおろした。出来る事なら警察に通報などして、後にしこりを残したくなかったからである。

隊員たちは公衆電話でタクシーを呼び、分乗して基地に戻った。別れぎわに老人が、

「基地に戻っても、今夜のことは喋らない方が、君たちのためだと思うよ」

髭の奥から柔和な目を覗かせて言った。

五人の隊員は口々に礼を言っただけだが、老人も中年の男にも、時折いやに若い所作が見え隠れし、あの二人は本当に風体相応の年齢なのだろうか、隊員たちは訝っていた。

この後、浜松市内では基地の隊員と、アウトローたちとのトラブルは影を潜め、基地に配属されてくる新隊員たちも、大手をふって制服のまま、市内にでかけられるようになり街の商店主たちを喜ばせた。

こういう出来事は、いつかは知れ渡るもので、元浜町の噂を耳にした杉浦は、それだけの杖術をこなす者とは、直感したが、その後市内のトラブルも治まったようだし、富田たちも課業外には、『武研』の修行に懸命な様子なので、あえて不問にした。

そしてこれからは、ますます『技』の鍛練にも増して、『心』の修行を強化しようとう決心していた。

城田育代は陽子から、杉浦と館山寺温泉で一夜を過ごしたことを聞いて、たまたまなく羨ましかった。

その夜の成り行きを、陽子に聞いても笑って答えなかった。あまり問い詰めるのも、はしたないと思うので止めたけれど、あの嬉しそうな表情では、きつと夫婦約束でもしたのではないかと思つた。森尾と比べると、武骨にさえ感じられる杉浦でも、そんな行動がとれるのに、——森尾さんは、何を考えているのだろう……と、もどかしかった。

陽子が言うには、杉浦さんが——森尾は育代さんを好きで、いつも彼女の話ばかりだよ……、と言つていたらしいが、それならなぜ私に直接言つてくれないのかしら……。

『シャンゼリゼ』で演奏しているときでも、誰か入つてくると、思わずそちらを振り向くようになってしまい、ママから、——最近落ち着きがないわね、と冷やかされる始末だった。

いつそのこと、基地に電話しちゃおうかしら、とも考えたが、森尾の了解を得てからでない、嫌われたら困る……。あれこれ考えあぐねて、仕事も手につかなかつた。

会社から自宅に戻ると、陽子から電話があつて、——明日森尾さんが来るわよと、弾んだ声で伝えてきた。

「本当？ 私お邪魔していいの？」

思わず心臓が高鳴り、耳たぶが熱くなるのがわかつた。

次の日は、朝からそわそわしつ放しで、ピアノの調律をしながらも、普段と様子が違うのか、同僚に——今日の育代さん、少し変よ、と言われてしまった。

残業も断り、定時の五時になるのを、待ち兼ねるようにして退社し、一目散に帰宅して入浴をした。そして浴室にある姿見の前で、全身を写してみた。

自分で見ても、スタイルもそう悪くないし、顔だつて人の好みがあるにせよ、陽子と比べても、そんなに劣っているとは思えなかつた。でも、陽子と違って、私には何か足りないところがあるのかも知れない。それで森尾さんが積極的になれないのかしら……あれこれと思い悩んでしまった。

浴室から出て、念入りにお化粧を整えてから、外出着を選びはじめたが、この季節に合うスーツはどれが良いのか、迷つて決めかねていた。

そういえば、この前逢つたとき、森尾さんは紺色のスーツを着ていて、僕はこの色が好きなんだと言つてたのを思い出した。

育代もちようど、二度ほど手を通しただけの、濃紺のツーピースを持っていた。

今夜は寒そうなので、本当は同系色のコートが欲しかったが、持っていないので仕方なく、いつも着ているダークブラウンの、ダスターコートで我慢した。

姉の令子から、誕生日祝いにとプレゼントされた、ルビーのネックレスを首から下げて、身支度を終わると、もう六時半になっていた。慌ててタクシーを手配していると、姉の令子が帰つてきた。

母親と姉に今夜の件を報告し、遅くなるからと断つているところへ、タクシーが迎えにきて、『しぐれ茶屋』に着くと七時少し前だった。

陽子がカウンターテーブルに、三人分の料理を揃えて待つていた。陽子も今夜は、黒のワンピースに真珠のネックレスで、いつも見慣れた、無造作なアップの髪形を、サイドパーク風に変えたのが、いままでよりずっと大人びて、妖艶な感じにさえ見える。

「まあ育代、綺麗になつちやつて、素敵よ」

陽子が冷やかした。

七時に、杉浦と森尾がスーツ姿で暖簾をくぐつた。育代は上気した顔を両手で押さえて、

「お久し振りです、ご無沙汰しております……」  
ちよつぱり皮肉をこめて挨拶した。

森尾は、育代がいる事など、予想もしていなかつたので、棒立ちになつた。

「育代さん、来ていたんですか、ちようど良かった。ここに着くまで森尾は貴女の話ばかりで、陽子さんに呼んでもらおうかと、考えていたところなんですよ」

杉浦が弾んだ声を出した。

「森尾さんお久し振り、そんなところに突つ立っていないで、どうぞこちらへ。お二人とも来るそうそう、育代さん、育代さんてなんですか。私もいるつていうのに」

陽子が冗談をいいながら笑つた。

四人並んで席につき、杉浦の脇に陽子が、森尾の傍に育代が座つた。早速グラスにビールを注ぎ乾杯した。陽子がまるで若妻のように甲斐がいしく、杉浦の世話を

やいている。女将が奥から現れて、「おやまあ、今夜は皆さんお揃いで。私はお邪魔みたいですから引つ込むわ。なにかあったら呼んでね」

四人の顔を嬉しそうに眺めてから、姿を消した。

「それはそうと研一さん、次の日曜日に時間とれますか？」

「日曜日ならいいよ、一日中？」

「できれば朝七時スタート、夜十時頃まで」

「朝の七時じゃ、土曜日の夜ワールドにでも泊まったほうが楽だな」

「あら、そうして戴ければ最高よ」

「いつのまにか、えらく親密な会話をするようになったな」

森尾が、真剣な顔で冷やかすと、

「あら、そう聞こえますか？」

陽子が顔を赭らめた。

八時を過ぎた頃から、客がたちこめて来たので、陽子がワールドホテルに移ろうと言いはじめた。

女将に挨拶をした杉浦が会計を済ませ、四人連れて浜松駅の構内を歩いてワールドホテルに入った。エレベーターで、展望レストランに昇ると、陽子が連絡してあったらしく、遠州灘を一望できる席が準備されていた。

簡単なおつまみと、森尾がウイスキーを飲みたいと言うので、カテイサークのボトルと水割りセットを運んで貰って、改めて飲み出した。

今夜も相変わらず雲は少なく、遠景に漁り火がちらほら揺れていて、夜空に満天の星がきらめいている。

杉浦と陽子には、いつかの夜も見た夜景だったが、また新たな感慨で眺めていた。

森尾は、はじめての夜景に心を奪われた様子で、育代と眺めながら、そこはかとない情感に包みこまれていた。

十時を過ぎた頃、陽子が杉浦の脇腹をつついた。——うん？

杉浦が耳を寄せると、

「今夜は二人だけにしてあげましょうよ」

手で囲うようにして囁いた。杉浦が、

「森尾、悪いけれど俺たちちよつと用事があるんで、いいかな」

さりげなく言った。森尾が、

「ああどうぞ、明朝の帰隊時間を忘れないように」

白い歯を見せた。陽子が育代に、

「じゃ、よろしくね」

言いながら立ち上がった。杉浦が育代に右手を上げて別れを告げると、育代も手を小さく振って微笑んだ。

杉浦が全部の会計を済ませ、エレベーターが降りはじめると、陽子が身を寄せ、

「早く二人きりになりたかった」

甘え声で唇を求めてきた。エレベーターの中なので、杉浦はちよつと口づけをして、肩を抱いた。

一階のロビーに出ると陽子が、

「どこに行こうか？」

首を傾げた。

杉浦が戸惑っている、

「じゃあ今夜は、私の家に来ない？」

陽子の言葉に、杉浦が——それは……、と迷っていると、

「大丈夫よ、私の部屋は離れだし、ママも私と研一さんのことは、了解ずみな」

隠し事のできない親子だった。

「もうちよつと飲みたい感じだな」

杉浦が言う、

「私の部屋で飲み直ししましょう」

陽子が息を弾ませて言った。

陽子の部屋は離れといっても、生活用品がすべて整えられた一軒家であった。台所も浴室も完備していて、部屋は八畳のリビングと六畳と四畳半の日本間がある。

昔、三田空将が一時、仮住まいにしていたところで、その後改装して、陽子の住まいにしたらしく、娘の一人住まいにしては、贅沢すぎる造りだった。陽子が、

「お風呂が沸いているからお入りになつて。その間に飲み物の用意をしますから」

新妻のような、華やいだ声で言った。

浴槽には湯が一杯満たされていて、ちよつど良い温度に調節されていた。陽子が、帰宅したとき、給湯機のスイッチを入れたらしい。

部屋の中すべてに、若い女性が住む清潔な香りが漂っており、控え目なインテリアが心地良かった。

浴室から出て居間に入ると、座卓に料理が並び、脇の長火鉢の上でお銚子を沈め



た鉄瓶が、白い息を吐いて微かな音を立てていた。陽子が、エプロン姿で、「よかったわ、躰に合ったみたいで、この間いつかこんな日が来ると思ってた、バジヤマや下着類、一通り揃えておいたの」

嬉しそうな目で、安心したように言った。杉浦は手回しの良さに、ただ頭を下げるのみであった。

「たまには、日本酒もいいでしょ」

お燗の具合を確かめながら、杉浦を床の間を背にして座らせ、陽子は長火鉢の傍に座り、杉浦にお酌をした。

杉浦も陽子の盃に、酒を注ぎながら、

「この長火鉢、陽子さんの趣味？」

珍しそうに眺めた。

「そうなの、どうしても研一さんに、そこに座って貰いたかったの。実はこれ、昔、三田のおじ様が使っていたものなのよ」

杉浦の目の前に、豪快だった三田空将の面影が急に浮かび上がり、思わずぐつと来た。

「ご免なさい、思い出させてしまつて」

陽子もしんみりした声になつた。

杉浦は出会いのときから三田空将に、亡き父親の面影を、重ね合わせるような思いを抱いており、それだけに三田空将の事故は、いまだに心の中で強く尾を引いている。

今夜はまるで、夫婦になつたみたいな感じだった。陽子が、隣の六畳間に布団を敷き、杉浦が横になつていると、後片付けを終えて入浴を済ませた陽子が、杉浦の脇に潜りこんできた。布団で寝るのが好きで、朝晩上げ下ろしをしているのだそうで、寝具は清潔で寝心地が良かった。表面は現代的だが、内面は古風なところのある娘らしい。

「研一さん嬉しい、ずっとこのままこうしていたい」

陽子が身を震わせて、杉浦にしがみついた。

杉浦も幸せだった。いつかは自分にも、こういう日が来るだろうとは思っていたが、こんな形でこんなに早く、生涯を通じて愛せそうな女性に巡り合うとは……、ふかくて激しい口づけ、陽子の震えが一段と高まつた。

朝、目が覚めると六時半だった。台所で朝餉の用意をしていた陽子が、「お風呂をどうぞ」

というので朝風呂に入り、朝食を済ませると七時半になつた。これから基地に戻り、術科学校の教官室には、九時までに出なければならぬので、慌ただしかった。

「あの二人、どうなつたでしょうね」

陽子が気がかりらしく呟いた。

「二人とも大人だし、しつかり者どうしだから、心配することはないよ」

杉浦が服装を整えながら、

「お母さんに、ご挨拶していかないと」

と言うと、

「あら、お母さんで言ってくれたわね、大喜びするわ。でもまだ寝ているので私から伝えておきます」

嬉しそうな顔で、タクシーを手配した。

まもなくタクシーが迎えにきた。陽子の、

「いつてらっしゃい……」

の声に送られて、タクシーに乗り込んだ。八時半にB O Qの自室に着き、制服に着替えて教官室に向う途中、森尾の部屋のドアをノックしてみたが、返事はなかつた。

## 二

育代は、陽子たちが立ち去つた後、なにを話したらよいものか戸惑つた。森尾も二人だけになり、言葉の接ぎ穂に困っている様子だった。育代が、

「私たちも出ましようか、以前行つた、このホテルの裏のスナックどうかしら」

森尾の目を覗くようにして言つた。

「ああいいですね、行きましよう」

待つていたように立ち上がり、レジに寄つた。

お連れの方が、先程全部お支払いになりました。と言われて森尾は、いつもながらの杉浦の心づかいに感謝した。

森尾がフロントで、宿泊の申し込みをすると、——生憎今夜は、満室でセミスイートならありますが……、と言われたので仕方なくチェックインを済ませた。

目と鼻の先にあるスナックに入ると、何人かの客が静かに飲んでいて、店内は閑散として見える。ママが、

「いらつしゃい、お久しぶり。今夜はお二人とも、スーツの色まで合わせて、本当

にお似合いね……」

真顔でお世辞を言った。ママがバーテンにサイドカーを作らせて、「お二人に今夜のプレゼント」

と言つて勧めた。カウンターに腰を降ろした二人は、サイドカーで乾杯したが、口当たりが良く美味しいカクテルだった。

バーテンに——もう一杯ずつ作つてと、森尾がオーダーして飲んでいると、急に酔いが回った感じになった。スローテンポなメロディが流れ、カップルがチークダンスをはじめた。ママの、お二人もどうぞの言葉で、育代が森尾の手を引いてフロアに出た。森尾が照れた顔で踊りはじめたが、もう何度も踊っているように呼吸が合い、二人の躰がリズムに乗った。

香しい育代の息づかい、男らしく清潔な森尾の体臭……、二人とも酔いに任せ夢見心地だった。サイドカーがカティサークの酔いを、フラッシュバックさせたようだった。

十二時近くになったので店を出た。育代がホテルの部屋まで送るので、腕を組んだまま三階の部屋に着いた。

森尾がフロントから受け取った鍵でドアを開け、中に入ると育代も一緒に入った。自然にどちらかともなく抱き合い、口づけを交わした。そのうち深いキスになり、二人の抱き合う手にも力がこめられた。

森尾は、一見やさ男に見え、マスクもハーフっぽいので、学生時代から女の子にはモテた。同好会の少林寺拳法部では、森尾目当てに入部する女子学生が、後を断たなかった。

拳法の指導では、懇切丁寧で優しいが、私生活では決して、特定の女性と交際しようとしなかった。途中で退部する女性が多かった。

決して女嫌いというわけではなかったが、厳格で、終生妻一人だけを大切にする父親の影響で、女性については、彼独特の考え方を持っていた。

森尾は、これまで女性経験がない。この頃はまだ赤線があり、先輩たちからも一人前の男として、洗礼を済ますようにと何回も誘われたが、笑って相手にしなかった。

皆、外見から受ける印象で、森尾の生き方を理解できず、もしかしたらホモなんじゃないかと言う者もいた。そんな事からも周囲の雑音が煩わしくなく、自衛隊の生活が気に入っていた。

自衛隊に入ってから、杉浦という男に出会い、親友という存在は、学生時代にの

み芽生えるものと思っていたが、卒業した後こんなに気の合う、尊敬のできる友人に巡り会えたのは幸運だった。

いままでも、おなじような年代の武道家とは、何人か知り合ったが、杉浦のような才能に溢れ、人間性の豊かな男に出会ったのははじめてであった。『技』も『心』も見習うべき点が多かった。

ワールドホテルで、育代と思わぬ成り行きになり、生まれてはじめての、目の眩むような体験をした。育代の唇は甘く、かぐわしい香りに包まれて、なんて優しく柔らかな躰なんだろうと、夢うつつのようなひとときだった。

でもそれ以上進めなかった。育代が何もかも、自分に委ねていることもわかってはいたが、結婚の約束もしていない乙女に対して、心のブレイキが働いてしまった。二人とも灼熱のように、燃えたぎっているのに、踏ん切りがつかないでいた。

育代にはまだ男性経験がない。森尾にすがりつき、すべてを委ねて夢見心地でいた。辺りはしんと静まり返り、二人だけの宇宙をさまよっていたが、いつまでたつても次の行動に移ってくれず、もどかしかった。でもここまで進んだ森尾との仲、嬉しかった……これ以上望むのは怖い気もした。

夢中で抱擁を繰り返していた森尾が、ふと我にかえったように顔をあげた。

「ああ、もう一時だ。帰らないと」

森尾が囁いた。一時間も抱き合っていたらしい。育代は森尾の背中に回した手を緩めず嫌々でもするように首を振った。

「今夜は帰ろう、送って行くよ」

森尾が言ったが、育代は黙って答えなかった。異性経験のない二人だけに、ひとときの嵐が去ると理性が呼び覚まされた。でも心はしっかりと繋がった。

もう一度、深い口づけを交わし合った二人は一階に降り、森尾がホテルマンを呼び起こして料金を支払い、タクシーを呼んだ。

ホテルの表に出て深夜の街に立つと、浜松特有の海風が、道路の紙屑や枯れ葉を舞い散らせている。森尾の腕に取りすがるようにして、育代は彼の肩に頬を寄せた。

——待っていてよかった、もう何があつても離れない……。胸の奥から嬉しさがこみあげてきた。

深夜だったがタクシーは間もなく来て、乗り込んだ森尾は、育代の家を經由して基地までのルートを示した。

車中で、森尾の左手を両手でしっかりと包み、育代は幸せな気分一杯だった。家前で車が止まり、降りるとき森尾の眼を見つめて、「今度、いつ？」  
「すぐ戻りたい思いをこめて訊いた。」

「こんどの日曜日にも、君さえよければ、ご家族にご挨拶したい」

育代が、えっ、と目をみはった。そして言葉の意味を悟ったのか、見る見る内に涙が滲み出た。

「嬉しい是非……」

森尾が、育代を包みこむような笑顔をみせて去った。

### 三

森尾が、航空自衛隊に入隊してから、四年目を迎えようとしていた。三月になっても、まだ寒さは残っていたが、中田島の砂丘に紋様を描く、遠州灘の潮風はもう春だった。

第一週の水曜日、森尾二尉に対して、美保基地への出張命令が出された。金曜日からは翌週金曜日までの期間である。

鳥取県境港市に、航空自衛隊の美保基地があり、防府北基地における地上準備課程から次の訓練段階として、福岡県の芦屋基地での初級操縦課程を終了すると、戦闘機パイロットの志望者は、浜松の第一航空団で、基本操縦課程の訓練を受ける。

輸送機パイロットを目指す者は、美保基地の第三輸送航空隊第四一飛行隊で、輸送機の基本操縦課程に進み、約一年半に亘る訓練を終了すると、晴れてウイングマークを胸に装着し、正式にパイロットとして、美保基地に配属される。

美保基地は、輸送航空隊の本拠地である。この基地には、浜松の術科学校で教育を受けた若者たちが多数勤務しており、年に一度行われる、整備課程を終了した隊員の状況調査のため、手分けして各基地に、教官が派遣されることになっていた。

今回の出張には、予定では別の教官が出向くことになっていたが、その教官が急病になり、森尾が代わることになったものだった。育代との日曜日の約束は不可能になった。

水曜日の夕方、『武研』の稽古が終わった後、森尾は杉浦を誘ってP Xの喫茶店でコーヒーを飲みながら、育代との約束を打ち明け、陽子を通じてでも、急に出張命令を受けたことを、育代に伝えて欲しいと頼んだ。

杉浦には、先日別れた後のことについては、まだ話をしていなかった。

「あの後、どこかに行ったのか」

杉浦が聞いてきたので、

「うん、ホテルの裏のスナックで、十二時頃まで飲んだよ」

「それでホテルに泊ったの？」

「いや、育代さんを家まで送って、俺も基地に戻ってきた」

「なんと、随分お堅い話だな」

「そうかな、でも将来の約束はした」

「えっ、口約束だけでか？」

「うん、それで充分だ」

杉浦が、呆れたような目で、しみじみ森尾の顔を見つめた。自分と比べて、この男みたくの顔を『石部金吉』というのだなと、つくづく感心していた。でも、森尾の顔は満足そうに見えた。

「森尾、出張から帰ったら。陽子さんの親戚が、焼津でマグロ料理の店をやっているのので食べに行こうと言ってるんだが、次の日曜日の予定を、その次にずらせて貰うから、育代さんも誘って行かないか」

言うて目を輝かせて、

「そりゃあいいな、俺はマグロが大好きなんだよ、焼津はマグロが上がる漁港だものな、育代さんも喜ぶと思うよ。ついでにそのことも伝えておいて貰えないかな」

「わかった、手配しておく、気をつけて行ってきてくれ、列車か？」

「いや、C 4 6だ」

「まあ行き帰りが面倒くさくなくていいか、制服着用なんだろう？」

「うん、久しぶりで美保湾の景色見てくるよ」

この夜はそれで別れたが、翌木曜の夜、杉浦はなぜかもう一度、森尾と話したい気持ちにかられ部屋を尋ねたが、出張の準備で忙しいのか留守だった。

金曜日、午前十時三十分、森尾はC 4 6で浜松基地から、美保 基地に向けて飛び立った。日本海沿いに進み、美保湾から基地に進入する空路だった。

杉浦は午前中の課業を終了して、昼食のため幹部食堂に行ったが、メニューに、マグロの煮付けが出されているのを見て、ふと、森尾がマグロを好物だと言ったのを思い出した。

アルミ製の食器類を、アルミの盆に載せて食事をはじめた。他に味噌汁と山盛りのポテトサラダがついていて、米八分麦が二分の飯だったが、味もカロリーも十分吟味されていて、残す隊員は殆どいなかった。

そのとき、急に食堂の入り口の辺りが騒がしくなり、一人の幹部隊員が、食堂の内部に向って——術科学校の整備課程の教官は、急いで教官室に戻って下さい……、と大声で告げた。

杉浦は、通信課程の所属なので、関係ないと思っていたが、なんとなく胸騒ぎがするので、食事を早めに済ませ教官室に戻った。居合わせた同僚の教官に、「整備課程で、何かあったんですか？」

それとなく訊くと、

「良く解らないけど、航空事故らしいですよ、C46が美保湾に突っ込んだと聞きましたが」

言葉聞いて、杉浦の顔色が変わった。——そのC46には森尾が搭乗している、思わず整備課程の教官室に向かい、小走りで急いだ。

整備課程の教官室は、騒ぎに包まれていた。何人もの教官があちこちに電話をしていて、隊員たちが立ち尽くし、正面にある大きな黒板に貼られた地図と説明文に見入っている。

黒板にチョークで、美保基地の電話が何本も書かれてあった。傍にいた空曹に、「美保で事故が起きたというのは、本当ですか？」

質問すると、

「ええ、本当です。美保基地から先程緊急連絡が入り、立川から浜松を経由して美保に向かったC46が、美保湾に突っ込むのが目撃されたので、現在捜索中だそうです」

「生存者の見込みは？」

「いいえ、それはまだ判りませんが、着陸間際の事故なので、大事なければ良いのですが」

それ以上の情報は、まだらしかった。

これから、午後の課業が始まるので、杉浦は自分の教官室に戻った。二時間に亘る課業は、マニュアルの解説についてであったが、心ここに非ずの心境だった。

課業終了後、直ちに教官室に戻り、早速同僚に、

「美保の基地はどうなった？」

森尾の無事を念じながら確認すると、

「残念だが、全員駄目だったらしい」

重い声で答えが返った。

杉浦の顔が蒼白になり、自分のデスクで頭を抱えた。なにも考えられなかった。

ただ森尾の顔だけが目の先にちらついていた。

杉浦は暫くそのままの姿勢でいた。科長の近藤三佐も他の教官たちも、森尾二尉が事故機に乗っていたのを知っているのだから、杉浦の心情を察して部屋の中は、重苦しい雰囲気になっていった。

やがて、近藤三佐が、

「杉浦二尉、気持ちはわかるが、この後の処理について協力を頼むぞ」

いたわるように声をかけた。

「申しわけありません、この後の行動について、なにかありましたらご命令願います」

杉浦は萎えそうな気持ちを奮い立たせた。近藤三佐が、

「とりあえず、『武研』の少林寺の連中に、事情を説明して、事態の推移を静観するように伝えておいてくれ」

直ちに杉浦は体育館に急いだ。道場には話を聞いた隊員たちが集まり、騒がしく、中には涙を流している者もいた。

杉浦が入って行くと、口々に状況を尋ねる声が殺到した。それを手で制して、「皆の気持ちはわかるが、もう暫く静観して情報を待とう、あの森尾二尉のことだ、もしかして生還するかもしれない、そのとき笑われぬよう落ち着こう」

隊員たちが一斉に静まった。杉浦が、

「今日の稽古は、取り止めにする。皆それぞれに自由行動をとりながら、情報を待とう」

隊員たちが、落ち着きを取り戻したのを確認してから、PXに向い公衆電話から『しぐれ茶屋』に電話をかけた。

開店準備中なのか、板前らしい男の声を取り次いだ。二、三分後陽子の声に代わった。

「お待たせしてご免なさい、お風呂に入っていたものですから」

陽子の屈託のない声が響いた。今夜八時、陽子と同行して『シャンゼリゼ』にいく約束になっていた。

「ごめん、今夜行けなくなっちゃった」

「あら、どうしてなの？」

陽子の声の不満げに尖った。

「森尾が事故に遭った……」

「ええーっ、どんな事故に?!」

陽子が悲鳴に近い声をあげた。

「美保湾で、森尾の乗った飛行機が落ちた……」

電話の向こうで陽子が震えている様子が、手にとるようにわかった。ややあつて、涙まじりの声で、

「育代になんて言ったらよいのか……」

語尾が震えた。

「僕もすぐそちらに行きたいんだけど、この後の情報次第では、飛ぶことになりそうなので、陽子さん今夜は頼むよ」

杉浦の言葉で、我に返つたらしく、

「研一さん気をつけてね、貴方になにかあつたら、私も生きてられない」

絞り出すような声だった。

#### 四

教官室に戻り、美保基地からの続報を待った。事故現場の状況は、浜松と美保基地の通信室での絶え間ない交信で、徐々に明らかになってきた。

事故機には、立川基地と浜松基地に所属する、二十一名の隊員が搭乗していたらしく、事故当時、操縦学生が操縦桿を握り、教官が副操縦席についていたもので、合計二十三名全員の死が確認されて、現在ダイバーが引き上げ作業を行っているとの事だった。杉浦は、全員死亡と聞いて一縷の望みも絶え、がっくりと肩を落とした。

翌、土曜日の午前、事故の確認と調査のため、基地隊と術科学校の関係者が、C46で美保に向け出発した。その中には杉浦の姿もあった。

正午近くC46は、森尾たちが辿つた同じルートを、日本海から美保湾に向つて着陸態勢に入った。

おりしも快晴で、早春の穏やかな海が、つい昨日大事故を呑みこんだ、同じ場所とは思えない表情でたゆとうていた。杉浦の目に、弓ヶ浜に打ち寄せる波頭の白さだけが、焼きついて残った。

美保基地の体育館に、二十三名の遺体が入った棺が安置されていた。杉浦は許可を得て、名札に森尾二尉と書かれた棺に近寄り、顔の位置にある開閉蓋を開けて、森尾と対面した。

森尾の顔は、生前のハンサムな面影が少しも損なわれておらず、いまにも杉浦に

話しかけてきそうに見えた。

「森尾、無念だったろうな、安らかに眠ってくれよ、いずれ俺も行くから、それまで待っていてくれ」

涙がとめどなく頬を伝わった。

翌日までに警察の検死が終わり、連絡を受けた家族が駆けつけて対面を果たした後、茶毘に付されて、遺骨は浜松基地に戻ってきた。

また、基地に半旗が掲げられた。基地葬となり、基地の隊員全員と遺族が参列した。育代も陽子も、近親者として参列できるように杉浦が手配した。

基地葬の日、風は冷たかったが、朝から雲ひとつない快晴だった。体育館に飾られた浜松基地の隊員十五名の遺影が、参列者に向つて微笑んでいた。

その中で、森尾三佐の端麗な面影が一際目だつ。殉職による二階級特進であった。森尾の遺族も、両親と兄が参列して、ハンカチで顔を覆っている。

育代も陽子も喪服で参列していた。二人の黒い和服が人目を引き、若くて美しいだけ周囲の悲しみを誘った。

育代はこの何日か、仕事も休んで泣き暮らしていると、陽子から聞いていたが、臉は赤く腫れ上がっていて足元もおぼつかなく、ようやく陽子に支えられて立っているように見えた。

二人とも、杉浦の制服姿の凛々しさと、躰全体から発散する男の悲しみに打たれ、尚更生前の森尾に想いを馳せたようで、新たにこみあげる悲しみに耐えかねてか、育代から低い嗚咽がもれてきた。

杉浦は、森尾の遺族に育代を引き合わせて、——森尾が生前愛した女性です……と紹介したが、遺族も育代もただ頭を下げ合うのみで、言葉にならなかった。

森尾の母親が、やつと声をふり絞りながら育代の手をとり、  
「有り難う、幸次がお世話になって」  
啜り泣きながら囁いた。

音楽隊が葬送曲を奏で、隊員全員が、号令のもと二斉に遺影に向けて敬礼をした。

杉浦は天を仰いだ。三田空将につづいてこの悲しみ、森尾のことは生涯忘れられないだろう、この、身を切られるような寂しさを、癒すことができるのだろうか……、荘厳な悲しみの儀式は続いた。

あれは森尾が逝って、ちょうど一年目の、三月半ばにしては寒風がふき荒む夜、『しぐれ茶屋』で飲んだ後、陽子の部屋に泊ったとき、陽子が深刻な顔で、いま育代の家で困った問題が起きていたと言った。

杉浦がわけを訊くと、育代の家の周辺がスーパーマーケットの用地として、地上げのターゲットになり、一番重要な角地に育代の家があるため、譲渡に同意しない育代の家族が、地上げを請け負った天成会系の暴力団に、嫌がらせを受けているとのことだった。

女三人の家族なので恐怖に苛まれ、最近は母親の容態もはかばかしくないらしい。

杉浦にとつては、聞き逃せない話だった。育代は、森尾が最後に愛し、思いを残して逝った大切な女性、近いうちに一度会って、相談に乗らなければと思った。

それから何日もたたないある夜、陽子から、基地にいる杉浦に緊急電話が入り、育代が暴力団に連れ去られたと、差し迫った声で伝えてきた。

早速、当直司令に、身内が急病なので出かけると届けを出して、基地の正門前に、車で迎えにきている陽子と合流した。

育代の家に着くと、姉の令子と病身の母親が、肩を寄せあって泣いていた。事情を訊くと、この家では気の強い育代が、家事を全部とりしきっていて、気弱な母や姉に代わって、地上げ攻勢に対応していたらしい。

今夜訪れてきた、二人の男たちとの話し合いの最中、育代の態度に因縁をつけた男が、どうしても拒否するなら、我々の依頼主に会って断ってくれ、そうすればこの話は終りにする。と言われ、育代はそれで嫌な思いから解放されるならと、必死で止める令子を振り切つて出かけたらしい。

そのあと、なんの連絡もなく、警察に電話をかけようと思った矢先、育代から電話が入り、——至急、家の権利証と実印を届けて貰えないかと、切羽つまつた声で言ってきた。それで、どうすればいいのか途方にくれて、陽子に連絡したらしい。

陽子は、事態の深刻さに驚き、杉浦に緊急連絡をして、一緒に育代の家に急行したものだ。事情を知った杉浦と陽子は、まず育代の安否を確認しようと考え、育代から指示のあった場所に急いだ。

その場所は浜松市の南寄りにある、寺の多い成子町で、人通りのない道路の右側に建つ、古びた木造の一軒家だった。玄関の脇には、『元浜町スーパーマーケット準備事務所』と、長たらしい看板が掲げられてある。

杉浦と陽子がチャイムを押すと、間もなく、一見してそれと見えるヤクザ風の男が顔をだして、

「誰だ、何の用だ？」

横柄な口調で尋ねた。杉浦が、

「こちらにお邪魔している、城田育代の身内です」

育代に届くような声で言うと、

「おう、権利証と印鑑持ってきたんか」

言いながら、もう一人男が顔を覗かせた。

「まず育代さんに会わせて下さい、それからです」

杉浦が言った。

「じゃあ、上がれ」

男が手で奥を示した。これから先、なにが起こるか予断ができないので、杉浦は、

「君は車で待っていてなさい」

陽子に言ったが、どうしても一緒にときかないので、仕方なく連れて上がった。

その部屋は、八畳間の応接室だった。ソファの隅に、育代が蹲るようにしており、顔色は蒼白で、右目の周りが青痣になっていた。躰つきのがつりした男が二人座っていて、嫌な目つきで、杉浦と陽子を待ち受けていた。男たちは四人で、育代を脅していたらしかった。

杉浦と陽子の顔を見て、育代は、——どうしてここに……と言いたげな顔をしたら、

「まあ育代、どうしたのその顔は？」

陽子が驚いて叫んだ。

「言葉の行き違いでそうなったんだ、大した事じゃないよ」

座っている男が、うそぶくように言った。杉浦が、

「それで依頼主さんと言うのは、どなたですか？」

育代の反応を見ながら確かめた。

「うん、来るのを待っていたんだが、あまり遅いんで呆れて帰ったよ」

男が、惚けた口振りで吐き捨てた。

「依頼主に会ってくれと言って、連れ出したらしいが、いないのではしょうがない、育代さん帰りましょう」

杉浦が育代に手を差し延べた。途端に男が、「この野郎！ てめえ何者だ。譲渡契約するつてんで電話させたが、どうなつてんだ！」

育代を睨みながら、怒鳴った。

「強制された契約は無効ですよ、それにまだ捺印しているわけでもなし、この次の機会に穏やかに話し合いますよ」

「冗談言うな、いちど口から出た事は、変えさせねえぜ、てめえらここに座れ」

男がソファを指さした。

立っていた男の一人が、陽子の腕を掴まえて、ソファに引つ張つて行こうとした。

陽子が嫌がつて手を振ると、その手が男の顔面に当たった。

「やりやがつたな、この女」

男が叫んで、陽子の頬を張り飛ばした。陽子が——キャーッ、と声を上げてしやがみこんだ。

嵩にかかった男が、もう一度陽子を蹴り上げようとした瞬間、杉浦の下段の蹴りが、男の左足を襲った。男が——うわーつと叫んで転がり、七転八倒しはじめると他の三人が色めき立ち、二人が短刀をとり出した。

震えている育代のところに陽子が駆け寄り、抱えるようにして、部屋の入り口に避難してから、電話のありかを目で探った。

杉浦は、この四人については、力の上ではさほど問題はないと見当をつけたが、足手纏いが二人いるので、どこで撤退しようか考えていた。

「陽子、ここはいいから、育代さんを連れて帰れ」

話すと同時に、一番躰の大きい四十男が、短刀を振り回して杉浦に躍りかかった。ビシーっ……、異様な音とともに短刀が飛び、右腕がくの字に折れ曲った。顔をゆがめた男が躰を丸めてのたうち回った。あまりの早さで、あつけにとられていた、三人のうちの一人が、慌てたように短刀を杉浦に向つて突き出した。

その二の腕を、杉浦の回し蹴りが強打した。凶器が男の手を離れるのと同時に、杉浦の右拳が、その男の水月を的確に捕らえた。

声を立てる間もなく、男が昏倒したのを見て、残った一人が拳銃を出してぶつ放すと、陽子が突然倒れた。左肩のあたりが見る見るうちに朱く染まって、血が吹

き出した。

「しまった！……」

杉浦は、躰じゅうの血が引く思いに襲われ、我を忘れた。

拳銃を持つ男が、再び引き金を引こうとした瞬間、杉浦の右足の蹴りが伸び、拳銃が轟音を発してスツ飛んだ。——とうっ……、の声と、——ぐわーっ、と言う悲鳴がきこえた。男の顔面に杉浦が、怒りに任せた正拳を叩き込んだものだった。

杉浦は、部屋の隅にある電話をとりあげて、一一九番に連絡をした。そして陽子に駆け寄り傷を確かめたが、陽子はショックで気絶している。

弾は上臍部を貫通していて、血液の流出が酷く、有り合わせの布で、押さえても押さえても血の流れが止まらなかった。

杉浦は、ズボンのバンドを引き抜いて、陽子の肩の付け根を絞りあげ、止血の手当てをした。間もなく救急車が到着して、育代に導かれて部屋に入った救急隊員は、驚いて棒立ちになったが、杉浦の指示で怪我人の陽子に応急手当てをしながら、救急病院に運んで行つた。

育代に、陽子の付き添いを頼み、救急車が出発したあと、杉浦は電話で警察に連絡した。

程なくパトカーが駆け付け、状況を見た警官が驚きながら、もう一台救急車を手配して、倒れている男四人を病院に運んだ。

## 二

杉浦は、パトカーに同乗して浜松署に出頭し、事情聴取がはじまった。杉浦は身分を明かし、電話を借りて基地の当直司令と警務隊に自ら連絡し、状況報告をした。

担当の刑事が、

「自衛隊の幹部ともあろう者が、こんな事件を起こしちゃ困るじゃないか！」

事情を知る前に大声を上げた。

陽子の傷は、幸い命に別条なく、骨にも異常がないとのこと、安静にしていれば心配ないだろう、との診断だったが、なによりも早いうちに止血の処置をしたことが、大事に至らなかつた原因だそうで、救急隊員も医師も、その冷静な行動を褒めていた。

拳銃を撃つた男は、杉浦の怒りに任せた一撃をまともに食らつたので、瀕死の重

傷を負い、明日にも予断を許さない状況だった。

あとの二人は、それぞれ脚と腕を骨折しており、当て身を食らって昏倒した男は、十日もすれば動けるようになるだろうとの結末だった。

杉浦は正当防衛だと考えていたが、覚悟はできていた。同じような事件を二度も起こしたのでは、理由はどうかあれ、航空自衛隊に残れるとは思わなかった。

この事件の後、浜松署は急ぎよ、天成会の拠点にガサをかけ、拳銃五丁、日本刀八振り、その他凶器とみなされるものを多数押収して、幹部を根こそぎ逮捕した。

元浜町のスーパーマーケット建設事業は、事業主も陰でそのような事が行われていたのを知って、計画を撤回したが、マスコミが騒ぎ立てた。

『地上げの話がこじれ、航空自衛隊の幹部と、暴力団の大乱闘。民間人の女性が撃たれて重傷。暴力団幹部も一名重体、二名重傷……』

の見出しと共に、各社こぞって面白おかしく記事を盛り上げた。前回と同様、事情を知った警察は、心情的に杉浦の味方だったが、二度目とあってマスコミ対策の手前からも逮捕し、世論に煽られた検察によって起訴された。

裁判の結果、『過剰防衛、傷害罪』で、懲役一年執行猶予三年の宣告を受けた。

航空自衛隊としても、事件直後に出された、杉浦からの退職願を受け取らざるを得ず、折角杉浦と森尾が心血を注いだ、『武研』も消滅した。

ただ拘留中、許されて面会に来た富田二曹が、

「自分たちは杉浦二尉の意志を守り、必ず立派な下士官として自衛隊の要になり、後輩の育成に努力します……」

心情の籠った言葉を受けたのが、なによりの餞けだった。

杉浦は思う、自衛隊はいかに理屈をこねようととも軍隊だ。いざと言う場合には、隊員の一人一人が自らの祖国同胞を守護する、鬼神とならなければならない。

そしていままで継子扱いされてきた自衛隊が、どう国民の心のなかで認知され、一旦緩急のあった場合隊員たちが、どのように心おきなく、危地に赴く事が出来るようになるのか……、幸い最近はこの問題を議論出来る土壌が育ちつつある。

この不安定な国際情勢の中で、強力な防衛組織を作り上げる為には、いかにして優秀な下士官のグループを育てるにかかると。

その意味でも、富田たちのような精強な下士官の覚悟に触れて心強かった。彼等は浜松の修羅場を自ら征服し、沈静化させた影のグループでもある。

この力は、祖国が万一危急存亡の淵に立たされるようなことがあった場合、凄絶な力を発揮することだろう。彼等は成長していた。意識の上では彼等こそ、本物の職業軍人だろうと思う。

かつて『武研』の集会で、彼等が話し合っていたことを思い出す。『いかに政治が混乱し、国の経済が疲弊しようとも、愛する祖国の山河の姿は変わらない、俺たちは、祖国防衛の任務についている事に誇りを持っている……』

杉浦は今日、愛してやまなかった航空自衛隊を去る。心おきなく巣立てる心境だった。石川基地司令や、中村術科学校長および近藤三佐には、長文の謝罪状を書き、一民間人となっても今回の教訓を身にしみて守り、立派な社会人として再起する事を誓い、これまでの格別な好意を裏切った事を詫びた。

裁判の期間、約六ヶ月拘留されていたが、法廷で執行猶予が宣告された途端、手錠、腰縄が外されて、晴れて自由の身になった。

後ろを振り返ると、陽子も育代も傍聴席にいた。法廷の外に出ると二人は、杉浦に取り縋って涙をこぼした。

杉浦は周囲を気遣い、二人に夕方六時にワールドホテルのレストランで会おう、と約束して、表で待機している報道陣の前に出た。

彼等の質問に、——今回の寛大な裁決に感謝していることと、例えいかなる理由にせよ、相手を傷つけた事は心から反省している……と所信を述べて解放して貰った。

そのとき、記者から聞いた情報で、杉浦から正拳をくらった男は、脳神経に異常を来たし、一生病院暮らしになるだろうということと、天成会の消滅と共に、対抗勢力の小田組も鳴りを潜め、それこそ貴方の怪我の功名ですとねと言われ、陽子や育代に後顧の憂いがなくなったのを知り、ほっとしていた。

ワールドホテルの展望レストランで、陽子と育代に会った杉浦は、三人でまた遠州灘の夜景に見入っていた。遙か彼方の洋上で、漁り火がさまようようにきらめいている。

周囲の人とその生きざまは、すっかり変わってしまったが、夜景に変わりはなかった。だが同じ夜景でも、見る人の心に写る印象は大きく違う。有名詩人の言葉で、『時が流れるのではない、人が流れるのだ……』、実感だった。

陽子も育代も、私たちのせいで杉浦さんの人生を台無しにしたと泣いたが、杉浦は、



「なあに、これからの人生見てくれよ、必ずやり直して見せるから」

二人を逆に慰めるように言った。

理由はどうあれ、有名人になってしまつて、浜松に長居はできなかった。まして陽子と育代という女性たちの将来を考えると、いつまでも近くににいるわけにはいかなかった。陽子が、

「そんな世間の風評なんか気にしないで、私と一緒にいて」

泣いて懇願したが、杉浦の考えは変わらなかった。

「再起して、必ず迎えに来る」

むりやり納得させて、その夜のうちに、思い出が一杯に詰まつた浜松をあとにした。東京に向かって出発する列車を、プラットホームで見送つていた陽子の、寂しそうな姿が今でも眼に浮かんで来る。

### 三

杉浦は再び現実に戻つた。あの日以来何度となく陽子呼び寄せて、一緒に暮らしたいと考えたことか。だが娑婆における厳しい生存競争の中で、なかなか陽子を中心して呼び寄せる状態にならなかった。

あれほど情熱を傾けた杖術も、浜松の事件以来、表舞台からは遠のいていた。その代わり第二の人生のためにと勉強した、都市計画や再開発のコーディネーターの資格をとり、少ない資本ではじめた会社が、バブルの波に乗つて急成長し、これで陽子の前に大手を振つて出られると、タイミングを計つているうちに、バブルの崩壊がはじまり、文字通り泡と消えてしまった。

陽子の手紙の中には、決まつて——いつまでも、お待ちしております……、と書いてあるが、彼女はもう五十歳を超えてしまつてゐる。でも何歳になつても陽子には変わらない、浜松で元気でいてさえくれれば自分も頑張れる。

目白駅の正面に立つと、目白通りが東西に延びている。学習院と反対側の下落合方面に向かい、約五分ほど歩くと、左側の道路に面して建つてゐる、細長い八階建てのビルが見える。東洋計画の事務所は六階にあつた。

土地建物の企画開発を請け負う会社で、バブル期には、ゴルフ場の開発にかかわる用地の買収に携わつたり、市街地の再開発にともなう予備調査や、権利変換業務などで業績は急成長した。

年号が平成に変わつて間もなくの頃から、バブル崩壊がはじまり、それまで社長の杉浦研一を含めて、三十名近い社員が暮らせたのに、現在では見通しのつかない不景気と、沈滞した国内情勢のため、社員数も激減して身動きの取れない状況に追い込まれてゐる。

杉浦は、最近すっかり暇になつた金曜日の午後、社長室のソファでまどろみながら、あの頃に立ち戻つてゐた。あれから三十年の月日が流れ、いろいろな出来事に遭遇した。

五年前に母を亡くし、最近弟たちとも疎遠になつてゐる。そんな中で森尾の面影は、いつでも鮮烈に蘇つてくる。

自衛隊を退職してから、三十年にもなるがその後の人生で、あのように気の合つた友人には巡り会えなかつた。

昨日、陽子から便りが届いた。時折、浜松の近況を知らせてくる。あれもばかな女だ……。俺なんかにかまけて、とうとう独身で一生を終えそうだ。『しぐれ茶屋』を建て替えて料亭にしたらしく、先代の女将も健在だと言つてきた。ときどき懐かしさで、胸が痛むことがある。

陽子から五年くらい前までは、人の噂も冷めたし、生活の心配は一切ないので帰つてきてと、何回も催促があつたが、最近諦めたらしく、近況を知らせてくるだけになつてゐる。

育代さんは結婚して、二児の母親になり、幸せに暮らしているらしく、ご主人は現在、東洋楽器の部長をしていて、家庭を大切にする人だそうだ。

——森尾、よかつたな……。陽子からの便りを読んだとき、天に向かつて呟いた。

いつの間にか桜の季節が過ぎて、東京近郊の山々が緑の衣で覆われる頃、八王子に住まう山岡は、杉浦に電話連絡を入れた。

「相談したい事があるので、暇をみて一度来宅願えないだろうか」久し振りの連絡だつた。

山岡はもう八十歳に近かつたが、いまだに矍鑠として、相変わらず町道場を続けており、近隣の子弟たちに心身の鍛練を指導している。

杉浦の生きざまを長い間見守つて来たが、彼の一途な性格を愛していた。ときどき、もし彼の父親だつた杉浦少佐が生きていたら、同じような生き方をしたかも知れないと思うこともあつた。

航空自衛隊を退職する羽目になつた原因も、その後における人生についても、注

意して見守って来たが、いつも一本筋が通っていた。もつとも、その筋のために、自分の人生を難しいものにしていく面があるが。

そのために努力する割りには、この駆け引きの多い社会の表舞台では、なかなか成功に結びつかないでいるようだ。

山岡の家は先祖代々つづいた、八王子在の大地主だった。戦後の農地解放で資産を分散させられたが、それでもまだ十町歩くらいの農地や原野が彼の名義で残っていた。

土地の大部分は『調整区域』に指定されていたが、三町歩、約九千坪が都市計画区域内の農地であり、その一部に現在の道場が建てられてある。

以前、バブルの頃は、建築会社や不動産業者が、土地を譲渡してくれと莫大な金額をちらつかせて煩かったが、ここところは途絶えている。

このように打ち続く不景気では、彼等も身動きが取れないでいるのだろう。山岡は結婚もせず独身を貫いていた。そのうち道場を広くして、総合的な『武道の殿堂』を造り、自分の人生の証しとしたいと考えていた。

そのために、かねてから杉浦を後継者として考えたが、機が熟すまではと心に秘めていた。バブルが崩壊し、杉浦も一通りの人生経験を積んだと思われるこの時期、事業についてゆつくり相談してみようと思った。

杉浦がはじめた会社が、バブルで調子の良い頃、同業者との共同慰安旅行で、熱海に招待されたが、同業者が、杉浦の企画力、構想力は、長年この業界に携わってきた我々も、舌を巻くような天才的な閃きがあると言っていた。

連休が明け、五月も中旬になった。杉浦は四月末の諸支払いには苦戦したが、まだ二三ヶ月はなんとかなりそうだった。

今日豊栄銀行に呼ばれて、銀行が不良債権として抱えている物件のうちから、いくつかを有利な条件で処分するため、再開発法の適用が可能な企画を考えてくれと頼まれたが、請け負いの条件が折り合わず、契約にまで至らなかった。

銀行も予算がなくて困っているのだろうが、こんな時期に足元につけこむようなやり方に反感を感じて、お断りするつもりである。明日は土曜日なので、山岡からの要請もあることだし、久し振りに八王子まで足をのばそうと考えた。時節柄、山岡もさぞ苦労しているのではないかと心配だった。

愛車のセルシオを運転して八王子に向かった。この車は乗り心地が良く、性能は衰えていないが、もう十万キロを超えている。

山岡道場のある場所は、八王子の市街地から少し離れた下恩方町で、陣場街道沿いにある。杉浦は新宿から首都高速に入り、中央自動車道を八王子インターで降り、市街地を経由して、追分町から陣場街道に沿って走った。

昔、高校時代、杖術の修行のため、幾度となくバスで通ったことのある道路の沿線は、宅地開発が進んで、見渡す限りの市街地に変わっていた。

八王子の丘陵部に、一九七〇年頃から多摩ニュータウンが建設され、宅地化が進むと共に、二十以上の大学が進出して、人口も一九九五年には五十万人に増えたらしい。

山岡道場には、十二時半に到着した。途中車内電話で到着予定の時間を連絡すると、昼食を準備してあるので、真っ直ぐに来るようにと、元気な声で山岡が言った。

到着すると、師範代だと名乗る三十代半ばぐらいの青年と、塾生が四人杉浦を出迎えた。約三十畳程の道場に続いた、隣接の食堂に案内されると、作務衣姿の山岡が待っていて、満面の笑みを浮かべて、自分の脇の椅子を勧めた。

山岡は髪が真っ白になり、白い顎鬚との調和が品良くうつり、年齢を感じさせない若々しい肌艶をしていた。

食卓の上には、山盛りのソバが用意されていた。「よく来てくれた、待っていたぞ。このソバは塾生が打ったもので旨いぞ」

山岡が待ちかねたように言った。塾生の若い力で、十分に練られたソバは腰がきいていて、素朴な味のタレと良く合い絶品だった。食べながら山岡が杉浦に、

「どうだ、そろそろ稽古をはじめては、何もしないと早く老けこむぞ」杉浦の素質を惜しんでの言葉だった。

「いや自分は、杖術道を汚した人間です。人前では杖を持たないつもりです」

「汚したって、なにをしたんだね、まさか浜松の件に、いつまでも拘っているのじゃないだろうな」

「いや、あの件からです。自分は相手を『心』で制することをせず、『技』で傷つけました」

「そのため、人の命を救い、人を生かしたのじゃなかったのか？ それに私は、君にこの道を究めてくれと言ってるのじゃない、躰と精神の健康の為にははじめたらどうか、と言っているのだ。こうブランクが長くては、武道家として生きるのは無理だろうしな」

山岡はそう言って笑った。杉浦も——仰せご尤も……と苦笑した。

でもこの長い月日、人前での稽古は一切やめていたが、朝夕、一人で修行する『形』の修練は欠かした事はなかった。

あのとき、たとえ愛する陽子が傷つけられたとはいえ、怒りに任せて相手を再起不能なまで、傷つけてしまった。『杖術の本分』である『相手を傷つけずに制する』ことが出来なかった。みな自分の未熟さのせいである。

それで他人を指導していたのかと思うと、居ても立ってもいられないような恥ずかしさで、杉浦は人知れず自分を鍛え直すため、ひたすら『形』の一人修行に打ちこんで来た。

#### 四

この日、山岡は心に期するところがあつた。人間は外側からのみではわからない。いくら信頼する杉浦でも、この年月の経過で、どのような垢を心に溜め込んでいるのかわからない、どんな手段でも覗いて見たかつた。それによつて、今後の方針を決めたいと考えていた。

もう私も年だ。いつまでも杉浦の心の流れを、待つてゐるわけにはいかない。それには、『杖』を持たせれば、『技』の巧拙よりも、『心』が覗ける……。

昼食後、一休みして塾生たちの稽古を見てから、打ち合わせをしようと、杉浦を道場に誘つた。道場で塾生たちの稽古を見つめる、杉浦の目が鋭かつた。

この後、山岡と師範代の『形』の演武が行われたが、さすが、山岡は凄かつた。

八十歳近いとは到底考えられない『技』を、次から次へと繰り出して、師範代を圧倒していた。模範演武が終つた後、山岡が、

「杉浦、こちらに来い」

有無を言わず、杉浦に杖を一本渡した。

杉浦もこれ以上辞退しては、師に対する非礼と思ひ、杖を手にして山岡と正対した。

山岡はその構えを見て、思わず息を呑んだ。試しに摺り足で右左に移動してみたら、一分の間でもあればその瞬間、ためらいなく打ち込むつもりでいた。

杉浦は、師がどう動くとも、ゆつたりと正対し、寸分の隙も見せなかつた。動きの中で誘いをかけても、つけこんで来ようともせず、磐石のような『受け』の構えでいた。それでいて、凄まじい気合いに圧倒された。

杉浦が、心ならずも歩まざるを得なかつた人生、それに耐え、長年孤独な修行で

積み上げた、心の底から発する無言の気合い……、密かに鍛練し尽くした、究極の『受けの形』が凝縮され、一本の杖に乗り移つていた。

「この男、以前よりも『技』が深くなつてゐる、更に円熟の境地に達してゐる……」

戦慄するようなひとときであつた。山岡が、

「それまで……」

厳しい声で言い、静かに自分の杖を引いた。目にうつすらと涙が滲んで来た。

「杉浦、これまで良い生き方をしてきたな、私は嬉しい」

師の言葉に、杉浦は恐縮した。人に誇れるような生き方だつたとは思つていない。

しかし、いかなる場合でも、人の信頼を裏切ることとはしてこなかつた。そしてこれと定めた道、他人はどうあれ一本筋だつた。

この後、山岡から大切な計画を打ち明けられた杉浦は、山岡の隠された財力に驚いたが、『自分の人生をかけて協力する』ことを誓つた。

帰りは夕方になつたが、道場の前の空き地に立つて、遙か奥多摩の山々を仰ぐと夕焼け空で、西の陣場高原の空は茜色に染まり、澄み切つた空気の中から微かな気配で、溪流の音が伝わつて来た。

#### 五

季節では夏の真つ盛りの筈が、気象状況が不安定なため、蟬の鳴き声さえ聞こえない日もある。暑くなるのか、涼しくなるのか、日本の政治をそのまま反映しているような日が続いてゐる。

杉浦は、目白にある東洋計画の本社には、女子事務員と専務だけを残して、従来の業務を継続させ、残りの社員を連れて、八王子の『武道の殿堂』創設の計画に没頭してゐた。

山岡道場の隣接に、プレハブ造りの現地事務所を設け、そこに寝泊まりして、それこそ昼夜兼行で業務を進めていた。この仕事は営利目的の事業ではない、山岡と杉浦の人生を集約するような計画だつた。

また、この仕事に従事してゐる人間は、自分たちの能力の限界まで出し尽くす覚悟で頑張つてゐる。その代わり、山岡から申出のあつた経済的な支援は、甘んじて受けさせて貰ひ、生活の心配はなくなつた。

着々と事業は進行して一年半後、第一期工事である本館が竣工した。残るのは、周辺の環境整備や付帯施設の充実であったが、それには時間を惜しまず、じつくりと良いものに仕上げるつもりだった。

事業費は、杉浦のグループが英知を絞り、関係官庁や団体から、補助金や助成金を引き出したので、山岡が驚くほど出費を押さえる事が出来た。

この施設は世間の注目を集め、地元の建設会社も採算を度外視して協力してくれ、総建坪が約一万平方米もある、『武道の殿堂』が堂々と落成した。

落成式には陽子も呼んである。十年前陽子が、このまま一生別れわかれで暮らすのは耐えられないと言って、東京に出てきたが、杉浦は苦戦の真つ最中だった。

見兼ねた陽子が、経済上の協力を申し出たが杉浦は断った。事業は金だけではない、流れに逆らって、いくら金を注ぎ込んでも所詮水の泡。勝てる時が来るまで待つてくれ……それが杉浦の考え方だった。

一週間だけ、目白の会社の近くに借りてあるマンションで、一緒に生活をしたが、足手纏いになると考えた陽子は、泣き泣き浜松に帰ったままだった。

長いようでも過ぎて見れば、夢うつつのような十年。こんなに理解しあえ相性も良いのになぜ十年も……、知り合いの時から通算すれば三十年……、男のプライドと女の執念？ いや、思うようにならない世の中に、必死に耐えた愛の期間だった。

杉浦は、陽子が東京駅に着く時間に、新幹線のプラットホームに出て待ったが、三十年前と同じような、心のときめきを押さえかねていた。

列車が到着し、前もって報らされていた中程の車両から、人の群れに混じって降りてくる陽子が、一目でわかった。

陽子も杉浦をすぐ認めたらしく、真つ直ぐ歩み寄ってきた。目尻に多少皺が増えたくらいで、中年女性の落ち着きと気品に包まれ、妖艶な気配さえ醸し出している。

三月も半ばになり暖かい日なので、紫色の和服姿で左手にコートを抱え、右手にボストンバッグを下げている。

杉浦が陽子のボストンバッグを持った。無言のまま目と目を合わせ、その姿勢のまま暫くの間、過ぎ去った年月をお互いの顔の探った。

陽子の目にぼつんと雫が現れ、見る見るうちに膨らんで頬を伝わった。  
「長い間、待たせたな」

陽子が無言で杉浦の胸に頬を寄せ、二人の間を隔っていた年月が消えた。

八王子の落成式で山岡に、——私の妻になる陽子です……、と紹介したら顔をくしゃくしゃにして喜んでくれた。

八王子における『武道の殿堂』の落成式が済んだ後、杉浦は陽子を送って浜松駅に降り立った。一九九一年五月八日に成立した、『暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律』、いわゆる『暴対法』で、ヤクザは市民権を失った。

浜松の街は、平和な太平洋ベルト地帯の、中心的な産業の街として発展している。航空自衛隊に対しても、現在では市民たちはなんの違和感もなく、その存在を当然なものとして受け入れていた。

『しぐれ茶屋』の先代女将は、七十歳の半ばを越えたが、まだ矍鑠としていて杉浦を大喜びで迎えた。杉浦は長年のご無沙汰を詫びた後、

「陽子さんを、頂きに参りました」  
深々と頭を下げた。

「呆れた人たちね、三十年もかかったなんて。でもそんな人たちがいても、良いのかも知れないわね、今の世の中、あまりにも急ぎすぎですものね」

顔は笑っていたが、涙が頬を伝わった。  
杉浦と陽子は、陽子の運転する車で中田島の砂丘に出かけた。砂丘は昔と少しも変わりのない姿で、二人を迎えてくれた。

山あり谷あり、風に吹かれてささくれ立った紋様あり、まるで二人が歩いてきた人生を、象徴しているかのようであった。

遠州灘から吹き寄せる潮風が、二人の髪をなぶって通り過ぎて行く。三月の海辺はまだ少し寒かったが、上気している二人にはかえって心地よかった。

橙色に膨らむ夕日が、今まさに沈もうとして、遙か沖合から金色の輝きが、砂丘にひたひたと押し寄せている。

二人の立つ姿が、後ろに長い影を引いていた。その影が手と手を繋いだまま、いつまでも無言で寄り添い、絵のように立ち尽くしていた。

◆引用及び参考文献

日本伝承武芸流派読本  
(神道夢想流杖術)

松井健二 新人物往来社

自衛官になるには

山中伊知郎 ぺりかん社

パイロットになるには

永峯正義 ぺりかん社

右記ご著書を参考にさせて頂きました。尚この作品はフィクションで、実在する個人、団体等とは一切関係ありません。